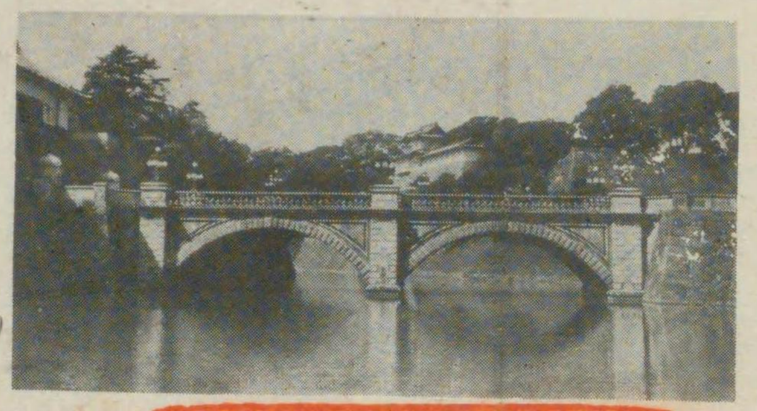
679-206
1200501577098
206

ㅋ5L86

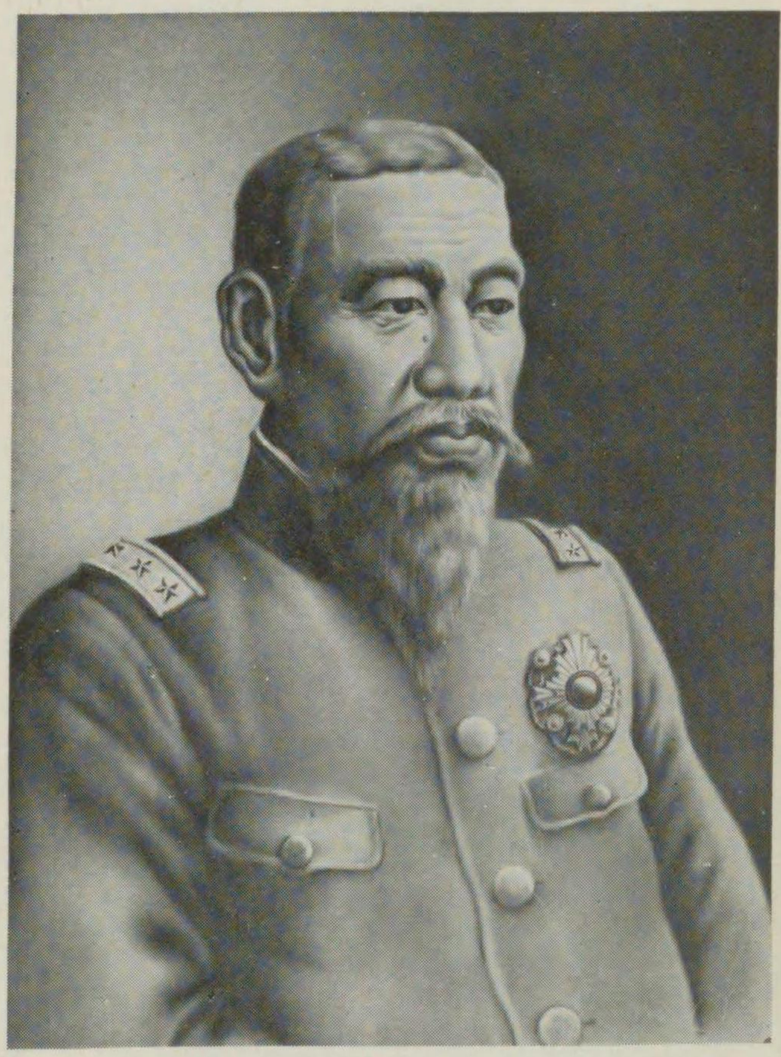


御尊影・教育勅語附

明治天皇御製集

東京　愛之事業社謹編

明治天皇御尊影



明治天皇御尊影

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ敎育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

679-206

679-206

詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益〻國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ內國運ノ發展ニ須ツ戰後日尙淺ク庶政益〻更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自疆息マサルヘシ

抑〻我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名御璽

明治四十一年十月十三日

內閣總理大臣副署

序

人間には神の如き半面卽ち道德的良心と、これに正反對な本能とがある。この二つが人間の心の中で常に鬪ひつゝあるのである。そして兎角この道德的良心が本能に負け易い傾向をもつてゐるために、氣の毒な人間となつて一生を終る人さへある。天眞爛漫たる幼兒が、深き親の慈愛に孚まれ、義務敎育の間に於ても、この道德的良心の陶冶を經、更に中等、高等の敎育に於て一層の洗鍊をされながら、いざ社會の人となる時には、何時とはなしにこの良心に曇りがかゝつてゐるのも、この本能に禍されるためである。

實に悲しむべきことであるが、所謂人間のあさましさとも謂ふべきであり、ここから社會の惡風潮が生れて來るのである。昭和の聖代にあつてすら、なほこの惡風潮が漲つてゐることは事實である。吾々日本國民たるものは、社會に漲る惡風潮を拂ひ除けて、眞に正しい輝しい日本國となすべき義務がある。國威

の宣揚も亦茲に基因することを思はなければならない。それには吾々はまだ〳〵修養をしなければならない。心の曇りを取り除かなければならない。そして日本國民の一人々々が誠の道を踐み行ふ立派な人間となつたならば經濟國難や思想國難が襲來しても、失業苦が押し寄せて來ても、少しも恐れるところはないであらう。畏くも　明治大帝陛下には、下々の吾々國民に、人として進むべき道を、多くの御製を以て御示し遊ばされた。宮内省藏版文部省發行の『明治天皇御集』には、多くの御製が收められてゐる、本書はそのうちから三百六十五首を撰び、これを一年三百六十五日に配し、毎日一首づゝを拜誦して、明治大帝陛下の洪大無邊なる御聖德を偲び奉ると共に、日々の修養の基本たらしむべく編したものである。なほ本書に收めた御製は「明治天皇御集」に忠實に據つたことをおことわりしておく。

昭和十年六月一日

索　引

（この索引は御製の初句を五十音順に排列したもので、同じ句二つ以上ある場合には次の句に及ぶ。）

あ

あかつきの……三四九
あきかぜや……二三七
あきの野の
　ちぐさの花の……二八二
　ちぐさの花に……二八三
あさしとて……七五
あさまだき……一五三
あさみどり……五四
あしはらの
　國とまさむと……五一
　國のさかえを……一
　みづほの國の……一三四
　あだなみを……一四九
　あたらしき
　　年のうたげの……五
　　年のたよりに……三
　　年のほぎごときくにはに……二
　　年を迎へて……六
あづさゆみ……一九五
　あつしとも……二三
　あつまると……三一
　あまぐもは……二九三
　あまたたび
　　かよひなるれば……六五
　　しぐれて染めし……三〇七
　あまつかみ……七一
　あまてらす
　　神のみいつを……二〇〇

神の御光……三四六
あめをうらみ……二七
あやまたむ……三三〇
あらがねの……二九五
あらしふく……一三六
あらたまの……三六三
あらはさむ……二一二
あるゝかと……一七九

い

いかならむ
　ことある時も……三三
　ときにあふとも……一五七
いくくすり……一六〇
いくさびと……三三〇
いさゝかの……一五九
いさみたつ……一六五
いさをある……二三一
いそのかみ
　古きためしを……二四一
　ふるき手ぶりも……一四一
　古きてぶりを……三三一
　ふるごとぶみは……八八
いたづらに……六四
いつくしと……一五四
いつくしみ……六三
いつはらぬ……七八
いつはりの……五九
いとたけの……三三四
いとまなき
　身も朝夕に……六八
　世にはたつとも……三三一
いにしへの
　人の功を……二八一
　文の林を……二六
　ふみ見るたびに……五七
いはがねに
　せかりざりせば……二〇六
　よせて砕くる……四五
いぶせしと……二一〇
いへとみて……二七一
いへのかぜ……二七四
いまもなほ……二〇五

う

うちつれて……八〇
うつせみの
　世のことわざは……二一
　世のためすゝむ……二四二
　世はやすらかに……一〇九
うつはには……二九四
うとましと……一七八
うみなさぬ……二七九
うもれぎを……二九二
うるはしく……一七七
うゑおきし……一八五

お

おいのさか……二八九
おいびとが……三五七
おごそかに……一三一
おこたらず……一六九
おにがみも……一九
おのがみは
　かへりみづしてともすれば……二四
　かへりみづして人のため……八九
おのがみを……一五三
おのづから……二六四
おひたちし……二七〇
おほぞらに
　そびえて見ゆる……五三
　つばさをのべて……二五二
おほぞらを……九二
おほゐがは……二九八
おもにひく……二三六
おもはざる……三一九
おもひいづる……八一
おもふこと
　いふべき時に……七九
　おほかる中に……二六七
　思ひ定めて……二〇
　思ふがまゝになれりとも……一四四
　しげからざりし……三五〇

つらぬかずして……一六六
つらぬかむ世は……三七
貫かむ世を……三三六
おやもこも……二三五

か

かゞみには……四八
かごのうち……二七六
かざらむと……一三
かしはらの……二三五
かぜふけば……三一二
かたしとて……三〇
かなしごを……四七
かはぶねの……一五八
かみかぜの
伊勢の宮居の事をまつ……四
伊勢の宮居を……二五七
からやまと……一九三
かりそめの
事に心を……三二七
言の葉草も……三九

き

きゝしより……二一九
きくたびに……一一二
きくにまづ……七七
きずなきは……二一七
くさまくら……一九六
くつがへる……一二〇
くにたみの……三六〇
くにたみも……一二八
くにといふ……一三
くにのため
あたなす仇は……三六
いよ〳〵はげめ……一七二
高きほまれを……九五
ながかれと思ふ……五二
身のほど〳〵に……二四八
くにをおもふ

臣のまことは……三一七
みちにふたつは……四〇
くむひとも……二〇九
くもりなき……一七五
くらゐある……三〇二
くれたけの……一二四
くれぬべく……一二三
くろがねの……九三

こ

こきうすき……二八〇
こゝのへの……三〇四
こゝろある……四二
こゝろから……三一八
こゝろすざ
方こそかはれ……一六三
方を定めて……二六〇
こゝろにも……三〇九
ことあるに……五五
ことしあらば……二五〇
ことしげき
世にたゝぬまに……三八
世にふる人も……二八六
世にも似たるか……二〇一
ことそぎし……一五
ことそぎて……二三三
ことなしと……二九
ごらはみな……二四三
こわかれの……三〇五

さ

さかきばに……二一三
さかづきを……一九七
さくらさく……九八
さゞれいしの……八
さしのぼる……二三八
さだめたる……一一三
さま〴〵に……一六
さま〴〵の
ことにあひにし……三五五
玉をあつめて……二六九
野菊の花を……二五六

し

しきしまの
大和心をみがゝずば……七
やまと心をみがけ人……三四一
やまとしまねの……八二
したさゆる……三四〇
したしみの……二三〇
しづがうへに……一一
しづのをが……三六五
しづのをも……一八九
しづむかと……九一
しなのなる……三二三
しのびても……一七
しばかりに……一七一
しらたまを……三四七
しるべする……一八〇

す

すがのねの……一〇七
すゝみゆく
世に生れたる……三六一
すゝむあり……九〇
すゝむには……一七四
すゝむべき……三三〇
すなほなる……二七三
すなほにも……二三九
すゑとほく……二八八
すゑとほく……五〇

た

たかどのの……一九四
たからとも……二三三
たゝかひの
かちにほこりて……三五二
にはにたふれし……二七二
たゞしくも……四九
たづなにも……一六二
たにがはの……一三八
たにはたに……三五三
たねなくて……二三四
たみのため……一九九

たらちねの
親につかへて……二四六
親の心を……二三三
親のをしへは……七四
おやの教を……一五〇
にはの教は……二四九
みおやの御代の……一四

ち

ちかきより……三三
ちはやぶる
神ぞ知るらむ……九
かみの力に……三三四
神のをしへを……一七〇
ちよろづの
仇にむかひて……一六七
民の心を……一一四
たみのちからを集めてぞ……九七
民の力をあつめなば……九六
ちりひぢの……一三〇

つ

つきのわの……二八五
つくろはむ……三三九
つはものの……三五四
つもりなば……四六

て

てるにつけ……二一五

と

ときおそき……一六八
とこしへに……八三
としたがき……一七三
としゝくに
おもひやれども……二〇二
光そひても……一九一
とつくにに……一一六
とつくにの……三二三
とほくとも
人のゆくべき……二七八
渡りてゆかむ……三〇一

ともしびを……二九七
ともすれば
うきたちやすき……一四〇
思はぬ方に……六一
さまたげられて……三二九
走りがきして……七三
とよらがた……三一五
とるさをの……二六八

な

なか〳〵に
色こそよけれ……一八三
みやびすくなし……二〇八
なかばにて……一九二
なぎぬれば……一〇四
なすことの……三一六
なつかしき……一〇八
なつぐさの……一九〇
なにごとに……二一六
なほざりに……一三五
なみかぜを……二五三
なみのおと……二九一
なよたけは……二六六
ならびたつ……一一五
ならびゆく……六七
なりはひは……三三

に

にひたかの……二三
ぬ
ぬばたまの……一三九
の
のるひとの……三〇〇
は
はぎのとの……二三七
ひ
ひさかたの
あまつ空にも……二〇三

空はへだても……二六二
空吹く風よ……二九〇
空ゆく月も……一八七
むなしき空に……二九六
ひとしきり……三一一
ひとしげき……三五八
ひとすぢを……七〇
ひとのよの……三二八
ひとみなの……八六
ひとむらと……一〇五
ひともわれも……三一四
ひとりして……二五一
ひとりみを……一九八
ひにそひて……五六
ひらかずば……二五五
ひらくべき……一〇一
ひらくれば
開くるまゝにいにしへに……一三三
開くまゝに思ふかな……二〇四
ひらけゆく
ときにいよ〳〵……一〇
世のさま見れば……一六四
ひろき世に
たつべき人は……五八
まじはりながら……八四

ふ

みみわくる……一八二
ふゆのよの……一七六
ふりつもる……三六四
ふりにきと……一二九

ま

まごゝろを
こめて錬ひし……三四四
こめてならひし……三三三
まじはりを……六二
まつりごと
いでゝきくまは……二三八
いよ〳〵しげく……三三八
きゝをはりたる……一〇六
たゞしき國と……三三七

よこしまならぬ……三六
まなびえて……九四
まへになり……二四四
まめやかに……六九

み

みがゝれて……三五一
みじかくて……八七
みち〳〵に……三四五
みづをさへ……九九
みなひとの……二三六
みなもとは……六六
みにあまる
重荷車を……四三
おも荷なりとも……二八
みをすてゝ……一〇三
みをまもる……三四

む

むかしより……一八八
むらぎもの
心たゆまず……一五五
心にたえず……一一八
心のかぎり……七六
心むなしき……二七七
むらくもに……一三六
むらくもの
おほふと見しは……一八六
たえま〳〵に……一八四
むらくもを……三一〇
むらとりの……三三五

め

めにみえぬ
神にむかひて……一四六
かみの心に……二四七
人の心の……一五六

も

もじをのみ……四一
ものごとに
うつればかはる……一三二

進まずとのみ……一一
ものまなぶ……二六三
ものわすれ……二三四
もゝとせを……一〇三
もろともに……二八七

や

やすくして……二四五
やどるべき……二九九
やまがはの……二五四
やまだもる……二一八
やまふかく……一四八
やまよりも……一八一

ゆ

ゆきふれば……三四三
ゆくひとを……二八四

よ

よきをとり……一二七
よにひろく……一六一
よのために……一五一
よのなかに
ことあるときぞ……二六五
しられていよよ……一四五
ひとりたつまで……一三五
よのなかの
風にこゝろを……三三五
事ある時にあひてこそ……二七五
ことまだ聞かぬ……二五
人におくれを……一四二
人のかゞみと……一一九
人の司と……三五
よのなかは……二一四
よのなかを……一一〇
よのひとに
まさる力は……二五八
めでらるゝまを……一三一
よのひとを……一四三
よはいかに……七二
よむふみの……三四二

よものうみ
なみしづかなる……二五九
みなはらからと……一八
よりそはむ……三六二
よろづよに……三五九
よわたりの……六〇
よをおもふ……二四〇
よをまもる……三五六
よををさめ……一〇〇

わ

わがくには……三
わがこゝろ……一三
わがしれる……三
わがそのに……四四
わけのぼる……一四七
わけばやと……二三九
わたつみの……三〇八
わたなかに……二一一
われもまた……一三七

を

をさなくて……二〇七
をさなごに……八五
をさめしる……一一七
をしへある……三〇三
をしへぐさ……三三二
をこちに……三四八
をちこちの……三〇六
をやまだの……二六一

索引　終

一月一日

あしはらの國のさかえを祈るかな
神代ながらのとしをむかへて

明治三十七年御製——「新年祝」

「あしはらの國」は日本の一名で、また豐葦原國ともいふ。天孫降臨卽ち瓊々杵尊が日向の高千穗の峰に天降りまします時に「豐葦原千百秋の瑞穗の國は、我が子孫の王たるべきの地なり。汝皇孫ゆいて治めよ。寶祚の榮えまさむこと天壤と共にきはまりなかるべし」と仰せられたに始まる。「神代」とは天地開闢の始め天之御中主神より神武天皇に至るまでの間をいふ。さて「神代のまゝにして皇統連綿、變ることなき新年を迎へて、彌榮えに榮えむことを祈らせ給ふ」。畏くも明治大帝の洪大無邊なる大御心の御發露と恐察し奉る。

一月二日

あたらしき年のほぎごときくにはに
萬代よばふ軒のまつかぜ

明治四十年御製——「新年松」

「ほぎごと」は祝賀のことば。「には」は場所、ここは宮廷の意。「萬代よばふ」は萬代を呼ぶこと。「よばふ」は呼ぶの連續する狀態を表はす語である。「新年に際して祝賀の詞を聽く廷に、吹く松の風も、萬歳萬歳と呼ぶやうである」との御意と拜する。げに新年こそは、萬象悉く清新の瑞氣漲り、祝賀の心自ら湧き立つ心地がするものであつて、下國民たる者は、深く〳〵皇恩の無窮なるに感じ、等しく聖壽萬歳を祈りながら、ます〳〵國威の宣揚に努め、自己の向上發展を心がくべきである。徒らにうか〳〵と所謂正月氣分に浸つて居る場合ではない。

一月三日

あたらしき年のたよりに仇の城
ひらきにけりときくぞ嬉しき

明治三十八年御製——「をりにふれて」

明治三十八年一月一日は、旅順口の守將ステッセルが、書を攻圍軍司令官乃木將軍に贈つて、旅順開城を申出でた最も意義深い日である。「たより」とは乃木將軍から大本營に達した旅順開城の奏上を申す。「仇の城」とは敵軍の城の意味で、旅順のこと。「新年にあたつて、流石難攻不落を誇り、多大なる皇軍の犧牲をはらつた旅順の堅壘も、我が皇軍の孜々奮迅の攻擊に抗し難く、遂に開城降伏したといふ知らせを聞くといふことは、何んと嬉しいことであらう」との御懷を御詠じ遊ばされた。旅順の陷落こそは我が國民もどんなにか待ち厭んでゐたことであつたらう。

一月四日

神風の伊勢の宮居の事をまづ
今年も物の始にぞきく

明治三十七年御製——「新年」

「神風の」は伊勢の枕詞、枕詞といふものは、歌調をとゝのへるもので、別に意味はないのである。「宮居」は宮を祀つてある處のことであるが、「伊勢の宮居」を伊勢神宮の意と拜してよい。毎年一月四日には政治始めが行はせられることになつてゐるのであるが、「その政治の奏上を聞召される前に、先づ伊勢大神宮のことの奏上を聞召す例になつてゐるから、今年も物の始め卽ち政治始めの前に聞く」と御詠じ遊され給ふ。神國日本の國民たるものは、須らく、毎朝起床潔齋が濟んだならば、先づ伊勢神宮と皇室とを遙拜し、次に祖先の靈に禮拜すべきである。

一月五日

新しき年のうたげのにはもせに
つどへる人を見るがうれしさ

明治四十三年御製——「新年宴會」

「うたげ」は宴會の古語。「にはもせに」とは場所も狹いまでにの意味で、野もせ・道もせなどに同じである。毎年一月五日は新年宴會とて、宮中の豐明殿に於て、文武百官に宴を賜ひ、更に勅語を賜はり、總理大臣及び首席の外國使臣奉答する例になつてゐる。「一月五日に於ける新年宴會の場所も狹きまでに、多くの文武百官たちが集まつてゐるのを見るのが嬉しいことである」との御意と拜し奉る。噫何んと畏れ多い御製であらう。この洪大なる御仁德を拜し奉つて、誰か感泣せぬ者があらうか。誰か涙なくして拜誦し得るものがあらうか。拜するだに畏き極みである。

一月六日

新しき年を迎へてふじのねの
高きすがたを仰ぎみるかな

明治九年御製——「新年望山」

「ふじのね」とは富士の嶺のこと。駿河の國にある我が國第二の高山で、觀光の外人も、東海道線の列車中から遙かに白扇倒さまに懸るこの靈峰を眺めては、その妙景に、たゞ〳〵「フジフジ」と感嘆の聲を發して嘆賞するといふ。この峻嶺世界を壓する富士の靈峰こそは、我が日本魂と共に、皇國日本の誇りとするに足るものである。「新年の晴れわたつた朝、東海の天に、天空高く聳える富士の靈峰を仰ぎ見ることである」との自然のうちにも、雄大の趣きある御製と拜する。富士の峻峰を仰ぎ見る者は、胸に雄大の氣奥り、一種云ふ可からざる崇高の心の湧き起るを禁じ得ぬであらう。

一月七日

しきしまの大和心をみがかずば
劍おぶともかひなからまし

明治三十七年御製——「劍」

「しきしまの」は大和の枕詞で、崇神天皇及び欽明天皇が都し給ひし、大和國磯城島の地名から、大和の別名に用ゐられ、轉じて日本國の總稱にも用ゐられるやうになつたのである。「大和心」とは、他の御製にも、誠の道を踐むこそ大和魂と仰せ給ふ。唯〻勇猛猪突の精神を發揮して徒らに戰爭や鬪爭するのが大和魂ではない。君に忠に、國を愛し、祖先を崇拜し、人倫を尊び、正義を重んじて、苟くも不正不義に對して敢然と起つこそ、眞の大和魂である。「この大和心を磨いて、誠の人間とならなければ、身に劍を帶びて武張つたところで、何の甲斐もないことであらう」と、誤られた大和魂を御誡め給ふ。

一月八日

さざれ石の巖とならむ末までも
五十鈴の川の水はにごらじ

明治二十二年御製——「水石契久」

これは明治二十二年歌御會始めの御製である。「さざれ石」とは小さい石のこと。「五十鈴川」は鈴鹿山脈から源を發して、伊勢大神宮の境内を流れる川であるが、ここは皇統に喩へさせ給ふ。「にごらじ」とは濁るまい・濁らないであらうの意。第一句、第二句は、國歌となつた「君が代は千代に八千代に」によらせ給へるものである。「小石が巖となる後までも永遠に、五十鈴の川水は濁らぬであらう」とは文字上の御意で、「建國の昔より連綿たる皇國の皇統は萬代不易で、いさゝかのゆるぎも、變化もないことであらう」との御意と拜する。畏くも明治大帝の堅き御信念のほどがうかゞひ奉られる。

一月九日

千早ぶる神ぞ知るらむ民のため
世をやすかれと祈る心は

明治二十四年御製——「述懷」

「千早ぶる」は神の枕詞で、その語義に就いては、諸説あつて一定せぬが、結局は神の威力ある方面を言ひ表はす語であると解するのが、最も當を得た解釋であらう。「國内は一の風波も立つことなく、和氣靄々の裡に皆生活の安定を得、安んじてその業務に從事し、一人として鰥寡孤獨に苦しむやうな者がないやうにしたいものであると、日頃念じてゐる心は、神のみこれを知ることであらう」とのいとも畏き御製と拜し奉る。噫、國民のためにかくまで御宸襟を惱ませ給ふ大御心のほどこそ、下國民として只〻恐懼の外はない。瞬時たりとも偷安の心を起さぬやうにしたいものである。

一月十日

開けゆくときにいよ〳〵仰がれぬ
聖の御代のたかきをしへは

明治四十年御製――「をりにふれて」

「世の中が開けて行く、卽ち社會の文化が進む時にあたつて、ます〳〵古聖賢の教訓がその光りを放つものである」との御意と拜する。他の御製「あつまると見れば離るゝ大ぞらの雲にも似たる人心かな」とを併せ拜する時、昭和の現代の人の心が、恰も天空に彷徨ふ雲のやうでないと斷言し得る者は尠ないであらう。明治・大正・昭和と開け來つた世の中である。益〻輕佻浮薄その度を加へ、極端なる利己主義が世を風靡し、人情の薄きこと紙の如くになつた時代に至つて、所謂昔の聖人・賢者の謂はれた崇高なる教へが、ます〳〵その價値を發揮するに至ることは必然であらう。

一月十一日

しづがうへに心をとめて縣もり
たづなき身をいつくしまなむ

明治三十八年御製――「仁」

「しづ」とは身分の賤しい者のことを云ふ。ここでは人民のこと。「縣」は地方官の任國、「縣もり」は地方官卽ち縣知事をいふ。「たづき」はよるべ・たのみとするところの義。「いつくしむ」とはなさけをかける・可愛がるなどの意。「なむ」はかく〳〵ありたいといふ希望を表はす助動詞である。地方官(縣知事)よ、民治によく〳〵心をとめて、身よりたよりのない者(鰥寡孤獨)には、特に目をかけて撫育せよ」と宣ふ。洪大無邊なる御仁德の御發露と拜し奉る。支那の賢人孟子も鰥(老いて妻なき者)寡(老いて夫なき者)孤(幼にして親なき者)獨(老いて子なき者)を最も憐れな者とした。

一月十二日

國といふくにのかゞみとなるばかり
みがけますらを大和だましひ

明治三十七年御製——「鏡」

「國といふくに」とは世界萬國の義。「かゞみ」はここでは手本・模範などの意味。「ますらを」は雄々しい男子、武夫のこと。「大和だましひ」とは君に忠に、國を愛し、五倫五常の道に協ひ、正義を愛するところの所謂日本精神をいふ。また大和心ともいふ。たゞ單に勇ましいだけを大和魂といふのではない。他の御製にも單に劒を帶びるだけでは、大和魂も何の甲斐もないと御諭しあらせらる。「吁!!日本國民は誠に感心である。日本軍人は忠勇義烈であると、世界萬國の模範となるやうに、大和魂を錬磨せよ、我が皇國の健男兒!!」との御意。げに世界に冠絶する日本精神の發揮こそは、我が皇國男兒の責務である。

一月十三日

かざらむと思はざりせばなかくに
うるはしからむ人のこゝろは

明治三十七年御製——「心」

「かざる」とは、自分の心にもないことを言つて本心を詐り飾ることをいふ。自分の體裁や利慾などのために心にもないことを言つて、相手の歡心を買つたり、或は虛飾を衒ふことは、よく世間にある例であるが、最も慎しむべき事である。「なかくに」は却つての意。「うるはし」は、ここでは美しいの意味である。「自分といふものを立派なもの、偉いものと見せかけるために、心にもない事を言つて、自分の本心を詐り飾ることがまゝあるが、それよりも天眞爛漫として本心のまゝに詐り飾ることをしなかつたならば、その方が却つて美しい心であることであらう」と、虛飾が人心の天眞を失ふを誡め給ふ。

一月十四日

たらちねのみおやの御代の昔をも
ことある毎に語りいでつゝ

明治三十七年御製——「思往事」

「たらちねの」は親の枕詞、「たらち」は足らしの義、「ね」は尊愛の辭で、もとは母の枕詞であつたが、後には親の枕詞となつた。「みおやの御代」とは、御父孝明天皇の御代を申す。孝明天皇の御代は、明治維新の機運が漸く熟してゆく頃で、外には黒船の渡來などあり、内には尊王攘夷の兩論鎬を削り、安政の大獄・櫻田門の變等畏くも叡慮を惱まし給ふことも自ら多かつたのである。「御父君孝明天皇の御代の昔を、今の御代に於ても、事件のある毎に思ひ出でられる」との御意と拜し奉る。明治大帝陛下には畏れ多くも御親を追慕する孝道の範を垂れさせ給ふ。

一月十五日

ことそぎし昔の手ぶりわするなよ
身のほどゝに家づくりして

明治三十八年御製——「家」

「そぐ」は削り去る意味で、はぶく・省略するなどの義。「てぶり」はならはし・風俗のこと。昔は住居も極めて簡單であつたから、ことそぎしと仰せ給ふ。この御製は「人は各〻その身分に相應した家を造つて、諸事簡略質素であつた昔のならはしを忘れぬやうにせよ。身分不相應な贅澤をせぬやうに」と、畏くも儉素節儉を敎へ給ふ。少し豐かな生活となるに從つて、自己の分限も忘れて、身分不相應な贅澤をして、世間に誇張して見せたいのは人間の弱點である。衣は以て寒さを凌ぐに足り、家は以て雨露を凌ぐに足るといふ觀念を忘れぬやうにしたいものである。

一月十六日

さまゞにもの思ひこしふたとせは
あまたの年を經しこゝちする

明治三十八年御製——「をりにふれて」

常に平和を好ませ給ふ　明治大帝陛下も、ロシアの横暴に對して、正義人道のため、將又世界平和のために、去る明治三十七年二月十日、ロシアに對して宣戰の大詔を煥發せさせ給ふ。旅順の難戰に次ぐに遼陽・奉天の大戰、更に日本海の大海戰等、國を擧げての一大戰爭であつた。爾來二年の間卽ち明治三十八年十月十四日、日露媾和條約批准に至るまで、この未曾有の大戰につきて、如何に宸襟を惱まさせ給うたかは、推しはかり奉るだに恐懼の極みである。「あまたの年を經しこゝちする」とのこの御製を拜誦して、誰が感泣せぬものがあらうか。誰か感激せぬ者があらうか。

一月十七日

しのびてもあるべき時にともすれば
あやまつものは心なりけり

明治三十八年御製——「心」

「しのびても」は耐へ忍んでの意で、困難艱苦に際し、よく刻苦忍耐してといふこと。「困苦艱難に際し、よく刻苦忍耐して、これを切り拔けるべき場合に臨んで、ともすれば自暴自棄の心を起したり、或は一攫千金の夢を見て、あらぬ道卽ち邪道に踏み迷ひ勝ちなものである」との御誡めと拜する。實に、艱難困苦こそは人生のよき試錬臺であり、登龍門である。强者はこの試錬を經、登龍門を突破して勇ましく月桂冠を贏ち得、弱者は落伍者となる。須らく人間は艱難困苦に遭はゞ、これこそよき神の試錬であると覺悟し、これに耐へ忍ぶやうに心がけなければならぬ。

一月十八日

よもの海みなはらからと思ふ世に
など波風のたちさわぐらむ

明治三十七年御製——「正述心緒」

御題の「正述心緒」とは、思ふことをありのまゝに詠みいづる義であつて、萬葉集に見える語である。「よもの海」とは四海卽ち世界のこと。「はらから」は兄弟。「など」は何とて・どうしての意。「波風」は、ここでは戰爭の意である。「世界中が皆兄弟と思召すに、何とて戰爭などがおこるのであらう」と、世界の平和を希ひ給へるに、他國から非道のことが出來て、國際間に事あることを歎かせ給ひし御製である。この年十二月、東京帝國大學講師アーサー・ロイド氏が、この御製を始め數篇を英譯して印行したるを、當時の米國大統領ルーズヴェルト氏が拜讀して、痛く感動したと言ひ傳へられてゐる。

一月十九日

鬼神もなかするものは世の中の
人のこゝろのまことなりけり

明治四十三年御製——「誠」

「鬼神」は恐しくして强暴なものをいふ。「まこと」とは、一言にして謂へば、人の言行にいつはりのないことをいふ。誠實・誠意などみな「まこと」の一である。「まこと」はまた眞の字を宛てる。眞は神に音同じく、神の如き言行が卽ち「まこと」である。「誠心誠意を以て事に當らば、恐しい强暴な鬼神をも泣かせるものである」との御意と拜する。誠意衷心を披瀝して事を行ふならば、如何に頑迷不遜の者と雖も、決して感動せぬといふことはない。若しありとするならば、それは自分の誠が足らないからである。燃えるやうな熱意が缺けてゐるからである。

一月二十日

おもふこと思ひ定めて後にこそ人にはかくといふべかりけれ

明治四十年御製——「をりにふれて」

「かうしようと思ふこと、例へばある事業をしようと計畫した場合には、いろ〳〵と凡ての方面を研究して、これならば充分實現することが出來ると、確然と決定してから、人にはかく〳〵しようと思ふと話すべきであつて、たゞ思ひついたり、計畫したりした位で、輕々しく人に話すべきではない。若しも自分の考へなり、計畫なりが、實行不可能になつた場合に、世間の人々から、あの人は輕率であるとの譏りを受けることになる」との御諭しと拜する。世間にはよく計畫倒れをして、次第に信用を失ひ、遂には「あの人は口ばかりである」と決定されて、誰も相手にしなくなる人がある。

一月二十一日

空蟬の世のことわざはしげくとも物學ぶまのなかるべしやは

明治四十三年御製——「をりにふれて」

「空蟬」は現し身の轉じたもので、空蟬と書くは宛字である。人・世などの枕詞。「ことわざ」は事業のこと。「物學ぶ」は學問すること。「やは」は反語の助辭で、ないことがあらうか、否あるといふ意味。「世の中の仕事がどんなに忙しいと云つても、學問をする時間がないといふことはないものであるから、必ず學問だけは忽せにしないやうにせよ」との御誡めと拜する。釋迦が、持合せがないから布施が出來ないといふ人は、縱令持合せがあつても布施をする人ではないと云つた。これと同じやうに、時間がないといふ人は、縱令時間があつても學問をする人ではない。時間は自分で作らなければないものである。

一月二十二日

わが國は神のすゑなり神祭る
昔のてぶり忘るなよゆめ

明治四十三年御製——「神祇」

我が國は伊弉諾尊・伊弉冊尊の二柱の神が造り給ひ、その御子天照大御神の皇孫、瓊々杵尊が、筑紫の日向の高千穂の峯に天降り給ひ、三代を經て、神武天皇は、大和國畝傍山橿原の宮に於て皇祖の御位に卽かせ給ひてから、皇統連綿として今日に至る。故に「わが國は神のすゑなり」と仰せ給ふ。「神祭る」は我が國は祭政一致の國で、政事と祭祀は共に「まつりごと」といふ語を以て表はす。「てぶり」はならはし。「我が國は神國であるから、祭祀は古代から行はれてゐる。この古代に於ける祭祀のならはしを努々忘れぬやうにせよ」との御諭しと拜し奉る。

一月二十三日

わがしれる野にも山にもしげらせよ
神ながらなる道をしへぐさ

明治四十三年御製——「教育」

「わがしれる」は我が領し統御し給ふの義。「神ながらなる道」とは神道のこと。神道とは、我が建國の歴史に基づいて、神を敬ひ、祭祀を重んずる我が國古有の宗教である。種々の宗派があり、その宗派によつて、多少その形式や説明に相違の點があるけれども、大體上述の意味に解してよいであらう。「道をしへぐさ」とは、神道の教育教訓などの意で、「くさ」といふところから、緣語を以て、野にも山にもしげらせよ、卽ち神道を天下に普く布きひろめよと宣ふ。宗教の自由は我が憲法に定められてゐるところであるが、我が國民として神道を信奉するといふことは當然なことである。

一月二十四日

おのが身はかへりみずしてともすれば
人のうへのみいふ世なりけり

明治四十三年御製――「述懐」

この御製こそは、誠に畏れ多い御教訓である。「傍目八目」とか、「燈臺もと暗し」とかは、世の俗諺にもあるが、自己の言行を省察するといふことは、言ふ可くしてなかなか行ひ難いことである。世の中には所謂偉いと云はれる人は多くゐるであらう。或は高位高官たる人、巨萬の富を得た人、或る技術に長じた人など、種々様々な意味に於て偉い人はあるであらうが、よく自己を省察して、自己を知るといふ人は最も偉い人である。自己を善く知る人は、他人の身の上を云々するものではないが、多くの人々は自己の身を顧みることなく、兎角他人の言動を批評したがるのが常である。最も慎むべきことである。

一月二十五日

世の中のことまだ聞かぬあしたこそ
人のこゝろはしづけかりけれ

明治四十三年御製――「朝」

「朝起きて、世間の出來事や噂さなどを耳にしない時が、最も心が平静である」と仰せ給ふ。誠に朝起きた時は前日の疲勞も醫えて、頭脳は極めてはれやかであるが、一度世間の風聞などを耳にする時は、ために心は動かされて、正しき判斷や善い考へが浮ばないのが常である。そこで朝起床したならば、身を潔めて、静かな一室に入り、昨日爲したことを篤くと考へて、その過なきかを檢討し、更に本日行ふ可き事について熟慮決定することが最も望ましいことである。これを半ケ月も連續する時は、遂に習慣となつて、自ら努力せずしてそれを行ふことになるものである。

一月二十六日

いにしへの文の林をわけてこそ
あらたなる世の道も知らるれ

明治四十年御製——「書」

「文の林」とは、書籍の數多いこと、林を樹の多きに喩へ給ふ。「古書を讀んで得た知識を根柢として、新しい社會の文物制度を見る時、そこに初めて新時代の正しい姿を知ることが出來るのである」との御述懷と拜する。論語、爲政篇に「故きを溫めて新しきを知る」とあるなども亦この意味である。我が日本の歴史を知らずして、將來の日本を造らうなどゝ考へる者があるので、現代の青年が往々にして、その多幸なるべき前途を誤る徒輩が出來るのである。西洋に生じた思想や主義を、そのまゝ我が日本に適用せむとするも、それは恰も砂中に樓閣を建てむとするやうなものである。

一月二十七日

天をうらみ人をとがむることもあらじ
わがあやまちを思ひかへさば

明治四十二年御製——「をりにふれて」

「天」とは天の訓讀で、かういふ場合の天とは天地萬物を主宰するもの、卽ち神の意である。支那では我が國の神のことを上天といふ。「ある事に失敗した場合に人はよく、神のせいにして神を怨み、他人が惡いと云つて人を咎めたがるものであるが、自分のなした事が間違つて居たといふことに考へ及んだならば、別に天を怨んだり、人を咎めたりする必要はあるまい。先づその失敗の原因は自分のやり方が惡かつたのであるのに心づくべきである」との御誡めと拜する。假に他人が惡いにしても、さういふ人と共同したり、或は使用したりする自分が矢張り惡いのであることを考へなければならぬ。

一月二十八日

身にあまるおも荷なりとも國の爲
人のためにはいとはざらなむ

明治四十二年御製——「義」

御題の「義」とは、みち・のりと譯し、五倫にあつては君臣の義をいひ、五常にあつては、仁・義・禮・智・信の一であるところの、一般社會に對する義理・大義をいふ。畏くも軍人に對して下し賜ひし勅諭の中にも「只々一途に己が本分の忠節を守り、義は山嶽よりも重く、死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ」と仰せ給ふ。「自身には少し重荷すぎて、自分の力では出來難いと思ふ事でも、國家のため或は他人のためになることであるならば、厭はずに、進んでしなければならぬ」との御諭しと拜する。現代には己のためならば無理でもするが、他人のためなら馬鹿々々しいといふ人の多いのを遺憾とする。

一月二十九日

ことなしとゆるぶ心はなか〳〵に
仇あるよりもあやふかりけり

明治四十二年御製——「心」

「ことなし」とは、國家的に言へば、戰爭や事變などのことがない意になるし、又、個人的に云へば、一家に大事件もないといふことになる。「なか〳〵に」はかへつての意。「世界に戰爭も起らず、國は無事泰平であり、生活には困らず、まづ〳〵呑氣であるなどと、心に油斷を持つことは、身に仇敵を持つよりもかへつて危險なものである」との御誡めと拜する。今は平和であつても、何時如何なる大戰亂が勃發せぬと誰が斷言し得るであらう。過ぐる大正十二年九月一日の大震災が再びないと誰が斷言し得るであらう。人は常に治に居て亂を忘れぬ心がけこそ肝要である。

一月三十日

かたしとて思ひたゆまばはなにごとも
なることあらじ人のよの中

明治四十二年御製――「述懷」

「かたし」は容易でない、困難であるの意。「迚も自分には爲し遂げることが困難であると思ふならば、世の中の事は一つとして出來ることはない」との御述懷と拜する。「なせば成るなさねばならぬ何事も、成らぬは己がなさぬなりけり」と古歌にあるも同じ意味である。精神一到何事か成らざらむやである。自分がかうと決心して爲すならば、何事でも決して出來ないといふことはない。かの世界併呑を畫し、破竹の勢を以てヨーロッパの大半を征服した時に「余はインポッシヴイリテイ(不可能)といふ語を辭書から取り除かねばならぬ」と言つた奈翁のあの意氣と決心こそ貴きものであると謂はなければならぬ。

一月三十一日

あつまると見れば離るゝ大ぞらの
雲にも似たるひと心かな

明治四十二年御製――「雲」

この御製は極めて平易に拜するが、現代の人々がこの御製を拜誦して、肺肝を刳られるやうな心地がするであらう。自己の出世のためには、暮夜ひそかに、臺所から上官を訪ねて恬然たる人々が多い。己の利得のためには、法網をくぐつて密かに賄賂を贈り、後日新聞の三面記事となつて社會にその醜を暴露する者が、算するべく餘りにも多いではないか。その醜狀たるや、蟻の甘きにつくが如しといふが、その譬の通りである。何と慨嘆に堪へぬではないか。然るに、一度利益を得ることが出來ないといふことを知れば、雲の風に散る如く散り果て、弊履の如く捨てゝ顧みない。人情の輕薄實に紙よりも薄い。

二月一日

近きよりゆかむとしてはなか〳〵に
遠くぞまよふ世の中のみち

明治三十九年御製――「道」

「なか〳〵に」は却つての義。「道」は道路を人生の行路に喩へさせ給ふ。「近道をしようとして、却つて遠く廻り道をすることになる」とは表面に表はれた御意で、一足飛びに出世しようと考へたり、一攫千金を畫して、一躍百萬長者にならうなど〻考へ、さて實行して見ると、事志と違ひ、或は法網にかゝり、或は零落の淵に沈淪して、再び社會に出て、元の身分になるまでには相當の年數を要し、却つて迂回の道を辿ることになる例が多い。縱令歩みは牛のそれの如く遲くとも、堅實なる道を歩一歩と進め、一段は一段毎に地歩を踏みしめて行くことが、兎と龜の競走ではないが、早く決勝點に到達するのである。

二月二日

なりはひはよしかはるとも國民の
同じこゝろに世を守らなむ

明治三十七年御製――「折にふれて」

「なりはひ」は職業。「守らなむ」は國民に世を守るべしと囑し給へる語である。「世の中には、政治家あり、法律家あり、醫師あり、官吏あり、會社員あり、商人あり、勞働者あつて、種々さま〴〵の職業に携はつてゐる國民が、縱令その從事する職業に相違はあつても、君には忠に、國を愛し、親には孝に、夫婦相和し、朋友相信じ、恭儉己を持して、等しく社會のため、國家のため、といふ心を持つて勵むやうにせよ」との大御心と拜し奉る。職業に貴賤の別なく、甲乙の差別あることはない。各自の天職を全うし、身を修め、一家を齊へ、忠君愛國の實を擧げるこそ眞の國民と謂ふ可きである。

二月三日

身をまもる道はひとすぢ位山
たかきいやしきしなはあれども

明治三十七年御製――「折にふれて」

「位山」とは位階のことを譬へていふ。飛驒の國にある山の名で、笏の用材を産出するところから、この名がある。「身をまもる道」とは孟子のいはゝ天爵とは、これから生ずるものと思はれる。勳等は人間の定めるところのものであるが、身をまもる道によつて、天爵の高下は定まるものであると孟子は云ふ。卽ち「仁義忠信、美を樂しんで倦まず、此れ天爵なり」と云つてゐる。「例へば正一位勳一等や正七位勳八等といふやうに、位階に高下の差別はあるけれども、人間として踐むべき正道に二つはない」と御諭し給ふ。庶民も亦同じく、身分に貴賤の上下はあつても、誠の道には決して二道はない。

二月四日

世の中の人の司となる人の
身のおこなひよたゞしからなむ

明治三十七年御製――「行」

「人の司」は、人の上に立つ人、仰ぎて儀表や師表たるべき人、國政に與かる身分の人などの義である。「國政に參與して、人の上に立ち、社會の儀表と仰がれる身分の人々は、その行ひの社會に及ぼす影響が、如何に大なるものであるかをよく〳〵考へて、苟しくも社會の批評に上るやうな行ひを慎み、適れ世の中の儀表たる人物よと仰がれるやうにせよ」との御諭しと恐察し奉る。苟しくも國政に參與する者が、國法に觸れる行爲があつた場合、それが社會の人心に及ぼす影響といふものは極めて甚大なるものであつて善きにつけ、惡しきにつけて、下これに倣ふものである。

二月五日

國のためあたなす仇はくだくとも
いつくしむべき事な忘れそ

明治三十七年御製——「仁」

「あた」は、我に害をするもの、かたきの意。「いつくしむ」はあはれむ、愛するなどの意。「な忘れそ」で忘れるなの意。かういふ場合の「な」を係りの語といひ、「そ」を結びの語といふ。現代では普通餘り用ゐられない語であるが、中古文には盛んに用ゐられた語である。「大日本帝國に對して、若し害を加へるやうな國があつたならば、正義の寶劍を拔いて、一擊のもとにうち碎いて懲らしめるべきであるが、然しながら仇は仇として、仁愛といふことを忘れてはならぬ」と御敎へを垂れさせ給ふ。外國には捕虜を凌辱慘殺することなどの例は、決して珍らしいことではない。

二月六日

思ふことつらぬかむ世はいつならむ
射る矢のごとくすぐる月日に

明治三十七年御製——「光陰如矢」

月日の過ぎ去ることが速かで、大御心に思召すことがたやすく成り難きを歎じさせ給へる御製である。月日の過ぐることを、射る矢の早さに譬へさせ給うたのである。支那の朱文公の勸學の詩に「少年老い易く學成り難し。一寸の光陰輕んず可からず。未だ醒めず池塘春草の夢。階前の梧葉已に秋聲」といふのがあり、同じく黃山谷の詩に「日月箭疾を過ぐ」とある。人間は徒らに醉生夢死するために生れて來てゐるものではない。從つて各〻かういふ事もやらう。ああいふ事も爲して見たいと、心に計畫してゐるうちに、月日は射る矢よりも早く過ぎて行き、軈て間もなく白頭となる。その時になつて悔いても及ばない。

二月七日

事しげき世にたゝぬまに人は皆
まなびの道に勵めとぞ思ふ

明治三十七年御製——「學問」

「事しげき世」とは、社會に出て、諸事繁忙な世の中の意。「まなびの道」とは學問のこと。「社會に出て、忙しい實務に携はるやうになつてから、學問をしようと思つても、なかなか出來るものではない。それ故に、まだ實社會に出る前、卽ち少年のうちに、しつかりと學問の道を勵まなければならぬ」との御諭しと拜する。殊に最近に至つては、學問をしても別に報酬を得る譯にはいかず、學校を卒業しても、直ちに就職するといふわけにはいかなくなつたために、學問を輕んずる傾向が生じて來たやうに見えるのは、甚だ寒心に堪へぬ傾向であると思はれる。學問は賣物ではない。人間完成の一方法である。

二月八日

かりそめの言の葉草もとものすれば
ものの根ざしとなる世なりけり

明治三十七年御製——「寄草述懷」

「かりそめ」とはちよつとしたといふくらゐの意味。「言の葉」とはことばの意で、更に言の葉草といふ。「根ざし」は言の葉草の緣語で、原因・根元の意味である。「ちよつとした言葉も、どうかすると爭論や恨を買ふ根元となるものであるから、言葉は輕々しく發するものではない」と御諭し給ふ。げに「口は禍の門」とかや。一寸した冗戲がもとゝなつて、遂に感情の阻隔を招き、遂には法廷で爭ふに至ることや、一婦人の口から軍機の機密が洩れて、遂に慘敗の浮き目を見るなどの例は決して稀ではない。誠に愼むべきは口なるかな。誠むべきは言葉なるかな。

二月九日

國をおもふみちにふたつはなかりけり
軍の場にたつもたゝぬも

明治三十七年御製——「述懷」

「軍人が戰場に出て、戰爭をするのも、軍人でない國民が銃後の衞をするのも、國を愛し、國家に盡す道に變りはない。言ひ換へれば、戰捷は全國々民の一致協力の結果によるもの、義勇奉公は、國民全體のことで、決して軍人のみに限るものではない」と宣ふ。明治三十七年の日露戰爭當時は、國民の熱誠がその高潮に達して、出征するもの、砲煙彈雨の間に馳驅するものだけが華かに見えたので、隈なく廣き大御心から、かくは御詠じ遊ばされたものと拜察申上げる。故に他の御製に、戰爭中であつても、國民各自は己の職業に勵まなければならぬと御諭しあらせ給ふ。

二月十日

文字をのみよみならひつゝ讀む書の
心をえたる人ぞすくなき

明治三十七年御製——「讀書」

「心をえたる人」とは、書物の內容を熟讀玩味する人のこと。「書物の文字を讀む人は多いが、その書物の內容を玩味し得る人は少ない」との御述懷である。明治維新以前の敎育に於て殊にこの弊害が著しかつた。學問の最初に四書五經を敎へるために、生徒はその內容や意味を味ふことが出來ない。甚しきは「讀書百遍意自ら通ず」といふ調子で、讀方だけを敎へるところさへあつたのである。最近受驗勉强といふものが始まつてから、またまたかうした傾向が生じて來たのは、誠に慨はしい次第である。學生は試驗を通過するために、たゞ諳記さへすればよいといふ風習が見える。

二月十一日

こころある人のいさめの言の葉は
病なき身の藥なりけり

明治三十七年御製——「藥」

「こころある人」とは誠心ある人の意。「誠忠なる人の諫言は、病人に於ける藥の如く、健康な身の藥である」との御意と拜し奉る。忠言は耳にさからひ易く、良藥は苦きものとは、昔からの言ひならはしである。可成り親密な交際の間に於てすら、忠告は容れられ難いのみならず、ともすれば却つて恨みを買ふことさへ屢〻あるものである。故に多くの人々はまあ〳〵といふやうな態度を持つて交際するために、益〻浮薄な交情となり、支那の管鮑の交はりといふやうな交際がなくなつて來る。友人知己は互に誠意ある忠告をし合つて、その短所を補ひながら向上するこそ、眞の知己と謂ふべきである。

二月十二日

身にあまる重荷車をひきながら
いそがぬ牛はつまづかずして

明治三十七年御製——「牛」

「ひきながら」はひきながらもの意。「己の身にも餘るやうな重い荷車を挽きながらも、のたり〳〵と歩む牛が却つて躓かぬものである」卽ち早く走る者よりも、徐々として行くものに過が少ないことを御諭し給ふ。昔支那の莊子が「才ある者は己の才のためその身を滅すものである」と云つた。この御製と共にな〳〵味ふ可き言葉であると思ふ。駿馬が足を折ることが多いやうに、才能ある者も亦蹉跌する場合が多い。縱令牛の歩みのそれの如くに遲くとも、歩一歩と堅實の歩みを續けるところに、堅實なる發展があり、磐石の如き地位を占めることが出來るのである。

二月十三日

我園にしげりあひけり外國の
草木の苗もおほしたつれば

明治三十七年御製――「植物苑」

「おほしたつ」は俗に育てるといふ意味に近い。草木の苗もの「も」に、我が國にあり來りの草木はいふ迄もなくの意味が含まれてゐる。「我が國にあり來つた草木は云ふまでもなく、外國の草木の苗をも育てたので、園に盛んに茂つてゐる」とは文字上の謹解で、惟ふに明治元年に下し給うたかの御誓文の第五條に「智識を世界に求め、大に皇基を振起すべし」と宣ひてから、ひたすら世界列國の長所を採つて、我が國の短所を補ひ給ひ、固有の文化と外來の知識とによつて、明治の盛代を見るに至つた。この御製は植物苑といふ御題によつて、廣く世界の長所を我が國に同化せしめむの大御心を寓させ給ふ。

二月十四日

岩が根によせて碎くる荒波の
しぶきにくもるいそのまつ原

明治三十七年御製――「磯波」

「岩が根」は岩の根といふ意。「しぶき」は飛沫のこと。「いそ」とは岩石の多いところをいふ。「岩の根に荒波がうち寄せて、そのしぶきのために磯の松原が見えぬやうである」との御意である。この御製を拜して、豪壯の氣自ら湧くを禁じ得ない。さうして社會にも亦この荒波が絶えず寄せて來つゝあるのではないかといふことが聯想される。而かもなほ磯の松の如く、この社會の荒波に妨げられて、その眞價を發揮することが出來ずにゐる人も數多くあるであらうことを思ひ起されるのである。人たる者はかういふ方面にも廣く觀察の眼を見張ることが、極めて大切なことである。

二月十五日

つもりなば拂ふ方なくなりぬべし
塵ばかりなる事とおもへど

明治三十七年御製――「塵」

「塵ばかりなる」は少しばかりの意。「なりぬべし」は俗に、なつてしまふであらう。「些細な事柄であるとて油斷をし、これを放任しておく時は、遂にはその處置に困るやうなことになるであらう。故に、微細なことをとて油斷せず、平素から注意が肝要である」との御諭しと拜する。「大厦高樓も蟻の穴から崩れる」とは支那の昔から云はれてゐる格言であるが、人の言行も亦この通りで、この位の事がと思つて放任しておくうちに、それが習慣となつて、次第に良心が痲痺し、遂には法を犯して、その身を滅ぼすに至ることが多い。故に些細な一小事であるといつて、決して輕んじて放任してはならぬ。

二月十六日

かなし子をたびにぞいだすあまざかる
ひなの手振をしらしめむとて

明治四十五年御製――「旅」

「かなし子」とはいとしい子・可愛い子。「あまざかる」は鄙の枕詞で、中央帝京のほとりを天と見て、それから離る意味であらう。「ひなのてぶり」は地方の風俗のこと。「地方の風俗をしらしめむと、可愛い子を旅に出した」との御意と拜し奉る。因に、この年三月、東宮殿下(大正天皇)には山梨縣に、また四月には、滋賀・三重の兩縣に行啓遊ばされた。我が國の諺にも「可愛い子には旅させよ」といふことがある。誠に知識見聞をひろめるには、旅行に勝るものはない。その反對の諺に「井戸の中の蛙大海を知らず」といふ。徒らに深窓の裡に人となつては、眞の人情風俗を解することが出來ない。

二月十七日

鏡にはうつらぬひとのまごころも
さやかに見ゆる水莖のあと

明治四十四年御製——「筆寫人心」

「まごころ」は、ここでは本心の意で、誠心・誠意の意味ではない。「さやかに」ははつきりと・明瞭にの意。「水莖」とは筆の義、瑞々しい莖の義からおこつたのであらう。「水莖のあと」は筆跡である。「鏡にはうつしてうつらぬ人の本心も、その人の筆跡には明瞭にあらはれるものである」との御意。「書は體を表はす」とは昔から謂はれてゐる。即ちその人が誠實であるか、或は粗忽者であるかは、その人の筆跡に判然と表はれるものである。故に如何なる職業に從事する人でも、一通りは書の稽古をして、常に丁寧に、明瞭に書くことを心がけなければならない。

二月十八日

たゞしくも生ひしげらせよ教草
をとこをみなの道を別ちて

明治四十二年御製——「教育」

「教草」は教育を草に喩へ、その緣語を以て、「生ひしげらせよ」と宣ふ。「をとこをみなの道」とは、男女各々その異なる道、即ち我が國は夫唱婦隨で、男は外に出でゝ業務に携はり、女は家にありて、家庭の事に從ふを以てその道とする。我が國は西洋の如く、決して男女同權ではない。一家庭の內で權利義務などを振りまはすやうでは、男女の道が明かであるとは云へないのである。そこが西洋と我が國との男女觀に、截然たる區別あるところであることを知らねばならぬ。「男女の道をはつきりと區別して、正しい教育を一般に普及せしめよ」との、いともありがたき御製と拜し奉る。

二月十九日

末とほくかゝげさせなむ國のため命をすてし人のすがたは

明治三十七年御製——「寫眞」

「末とほく」とは、永久にの意。「國のためすてし人」とは國家のために戰爭に出で、忠勇義烈の功をあらはして、名譽の戰死をした者をいふ。「すがた」はここは寫眞のこと。そこでこの御製は「國家のために、名譽の戰死を遂げた人々の寫眞を、永久に揭げさせよう」との御意と拜する。明治二十七八年の日清戰役の記念である振天府、明治三十三年の北淸事變の記念である懷寧府、明治三十七八年戰役の記念たる建安府を、宮城內に建てさせ給うたが、その中に名譽の戰死をした陸海軍將校の寫眞を揭げられたのは、この洪大無邊なる大御心からおこつたものであらうと恐察されるのである。

二月二十日

あしはらの國とまさむとおもふにも青人草ぞたからなりける

明治三十七年御製——「寶」

「あしはらの國」は我が大日本の古名である。詳しくは第一頁を見よ。「青人草」は民のことで、世の人が生れ殖えるのを、草が彌益に生ひ茂るに譬へていふ語である。また蒼生・蒼氓などゝもいふ。伊弉諾尊が黃泉國から御逃げ還りになつた時「所レ有宇都志伎青人草之苦瀨に落ち云々」と仰せられた。「我が大日本帝國を富强ならしめむと思ふにつけても、人民こそ國の寶である」と仰せ給ふ。この大御心こそまさしく明治の聖代をきづきなされた基となつたことゝ拜し奉る。我が國は建國のその始めに神武天皇の橿原奠都の詔にも「苟しくも民に利有らば、何ぞ聖皇を妨げむ」と仰せられた。畏き極みである。

二月二十一日

國のためながかれと思ふ老人に
しなぬ藥をさづけてしがな

明治三十七年御製――「藥」

「ながかれ」とは長くあれの義。「しなぬ藥」とは不死の藥のことで、その製法は詳かでないが、支那の道教で、仙術を以て造られたのであると言ひ傳へられてゐる。昔支那の秦の始皇帝が、除福といふ人に「東海中に神仙の國がある。そこへ行つて不死の藥を求めて來い」と言ひつけられて、我が日本に渡り、そのまゝ行衛がわからなくなつたと言ひ傳ふ。この藥を飲めば、何時も若々しくて、永久に死ぬことがないといふ。「國家のために長命を保つやうに、不死の藥を與へたいものである」と老臣を愛撫し給ふ大御心の御發露がこの御製となられたものと拜し奉る。

二月二十二日

おほぞらにそびえて見ゆるたかねにも
登ればのぼる道はありけり

明治三十七年御製――「峯」

「天空高く聳えて、迚も人間業では登れないと思ふやうな高峰でも、いざ登らうと決心して登るならば、矢張り登れる道はあるものである」との御意と拜し奉る。いかに困難なる事業も、その志さへ堅固であるならば、成功すべき手段は必ずあるものであると御諭し遊ばされた。俗歌にも「なせば成る、なさねば成らぬ何事も、なさぬは己がなさぬなりけり」といひ、支那の朱熹も「精神一たび到らば何事か成らざらむ」といつてゐる。然しながら茲に注意すべきは無謀を敢てせよといふ意味ではない。蟷螂の斧に向ふ愚はどこまでも慎むべきであるが、現代人は一般に堅固なる意志に缺けてゐる傾向がある。

二月二十三日

あさみどり澄みわたりたる大空の
廣きをおのが心ともがな

明治三十七年御製——「天」

「あさみどり」は淡碧の意。「心ともがな」とは、心を持ちたいの義、「がな」は何々したといふ願望の意を表はす語である。「一點の曇もなく、淺綠色に澄みわたつた大空は、洪大無邊、見渡す限り際涯のないものであるが、そのまゝ御自身の心としたいものである」との御雄大尊嚴なる御感想が御製の上に御發露されたものと拜される。昔から聖賢が明君聖主の仁德を表頌し奉る詞に、仁天の如しとか、德天の如しとか謂はれたが、これをそのまゝ實現化せられたのは、誠に　明治大帝にまします。萬世一系の帝祚を踐ませ給へる　上御一人の御製として、誠に尊く拜される。

二月二十四日

事あるにつけていよ〳〵思ふかな
民のかまどの煙いかにと

明治三十七年御製——「民戸煙」

「事ある」は有事の意、この年は日露戰爭のあつた年であるから、日露戰爭を指し給ふと拜する。「民のかまど」とは國民の生活のこと。「日露戰爭があるにつけても、國民の生活はどうであらうと、ます〳〵案ぜられることである」との御意と拜する。古くは仁德天皇が六年間租稅を御免になつて、百姓の富まむことを願はせられ、醍醐天皇が寒夜に御衣を脫がせられて、國土の人民の凍餒の苦みを偲ばせられ、其他御列聖の御仁慈の大御心は我が國史に明かなところである。我等國民は實に斯くの如き善い國土に生れたことは、何といふ幸福なことであらう。

二月二十五日

日にそひてけしきやはらぐ春の風
よもの草木にいよよふかせむ

明治五年御製――「風光日々新」

「日にそひて」は日一日との意。「けしき」は山川風物などのおもむき。「よも」は四方の意。「いよよ」はいよ〳〵の意である。これは明治五年の歌御會始の御製である。「日一日と春景色になり、柔かい春の風が吹くが、この春風を四方の草木に普く、ます〳〵吹き及ぼさせたいものである」とは、表面の御意で、「維新の大業も全く成り、春風駘蕩たる如く、國威益〻揚り、國民亦和氣靄々としてその業に勤しみつゝある。朕が仁政を尚ほ一層四方の國民の上にかけたいものである」。との御意と恐察し奉る。ありがたき御仁德のほど、下國民としてたゞ〳〵恐懼の外はない。

二月二十六日

いにしへのふみ見るたびに思ふかな
おのがをさむる國はいかにと

明治十一年御製――「述懷」

「昔の書を見る毎に、御躬ら治むる國はどうであらうかと思ふことである」との御意と拜する。世界無比の國體を有する我が大日本帝國の　天皇陛下にして、はじめてこの御製ありといひ奉るべきである。岩倉具視公がこの御製を承はつて詠んだ歌に「古へのかしこき道を一すぢに、ふみ見て國は開けますらむ」と。又、元田永孚先生の近講錄の一節に「臣素より　陛下の省察力行、祖宗の聖帝明王に愧ぢ給はずして、曾子の自修に明察する所あるを信ず。嘗て後宮に侍して之を聽けり、古への文見る度に思ふかな云々。聖躬の深く親ら省みることかくの如し。苟も此聖心を存養擴充せば、唐虞三代も之に超ゆることなし」と。

二月二十七日

ひろき世にたつべき人は數ならぬ
ことに心をくだかざらなむ

明治四十二年御製――「述懷」

「廣い世間卽ち社會に立つて活動すべき人は、物の數でない事結局小事に心を碎かぬやうにせよ」との御諭しと拜する。漢の高祖の武將樊噲は高祖に「大行は細瑾を顧みず、大禮は小讓を辭せず」と注意したのも、矢張りこの御製の意と相似たるものがある。かの大石良雄が祇園遊興の砌り、一薩摩武士のために、この腰拔け武士と面罵されて、放り與へられた肴を有りがたく推し戴いたといふ話があるが、主君の仇を報ずるといふ大事の前には、一武士の面罵は些細なる一小事に過ぎない。大石良雄にこの覺悟と襟度があつたればこそ、主君の仇を報じて、喃れ忠臣の名を全うし得たのである。

二月二十八日

いつはりの世をまだしらぬ幼子が
心や清きかぎりなるらむ

明治四十二年御製――「子」

「いつはりの世」といふこの一句をありがたく考へるべきである。これをもう少し極言すれば虛僞の世の中である。現代はこの御製の一句の如く、餘りにもいつはりの多い社會である。かけひきやトリックの多い世の中である。「まだ知らぬ幼子」とは幼兒の心は天眞爛漫で、社會の虛僞やかけひきの如き惡い反面を知らぬ兒の意。「虛僞の世の中を知らない幼子の心が清淨の至極である」と、清きまことの心を貴ばせ給ふところから、かくは詠ませ給へる御製と拜する。生存競爭が激甚となるに從つて、醜い社會の半面が益〻多くなつて來ることは、實に悲しむべき現象である。

三月一日

世わたりの道のつとめに怠るな
心にかなふあそびありとも

明治四十二年御製――「遊戯」

「世わたり」とは生活のこと。「どんなに自分の心にかなつた好きな遊びがあつても、生活の道のつとめだけは怠らぬやうにせよ」との御諭しと拝する。圍碁・將棋・ダンス・麻雀などの遊戯に熱中して、家庭爭議を起し、遂に勤を怠つた故に、馘首の浮き目さへ見る者が多くある世間の例であるが、人間の弱點として適度にやるといふことはなか〳〵困難なことである。殊に好きな道には熱中し易く、何物をも打ち忘れて凝るのが常であるが、決して遊戯をしてならぬといふのではない。趣味として適度に遊戯をやるといふことは、悪いことではないが、家業を忘れぬやうにしなければならぬ。

三月二日

ともすれば思はぬ方にうつるかな
こゝろすべきは心なりけり

明治四十二年御製――「心」

「ともすれば」はやゝもすると、ちよつとした調子に。「こゝろすべきは」は注意すべきはの義。この御製は「動もすると、思ひがけない方面に移り行きがちなのは、人間の心である。注意に注意をして、あらぬ方面に心を向けぬやうにせよ」との御主旨である。自分ではさうしようと思はぬでも、ある機會に逢着した場合、知らず識らずに、自分の豫期せぬ方面に深入りをして、遂には抜き差しのならぬ羽目に陷り、始めてそれと氣付いたところで、時既に遲く、社會の落伍者となつて、可惜一生を過さねばならぬやうなことになる場合が多い。故に常に注意を怠つてはならぬ。

三月三日

まじはりをむすぶ國々よろこびを
いひかはす世ぞ嬉しかりける

明治四十二年御製——「祝言」

「まじはり」とはこゝでは、國と國とのまじはり、卽ち國際のこと。「國際のある國々が、互にその喜びを言ひかはす世の中が嬉しい」と、國際間の平和を喜ばせ給へる御歌である。日清・日露の二大戰役後は、世界各國は、我が日本を好戰國であるかの如く誤解してゐる傾向があつたが、我が大日本帝國は、自ら好んでなした戰爭は未だ嘗て一としてない。日清戰爭は清國の朝鮮に於ける暴戾を膺懲するためであり、日露戰爭も亦三國干涉をなして、遼東半島を我が物となし、これを足場として東洋の平和を攪亂しようとしたために、正義人道と東洋永遠の平和とのために止むなく日露の開戰となつたのである。

三月四日

いつくしみあまねかりせばもろこしの
野にふす虎もなつかざらめや

明治四十二年御製——「仁」

「いつくしみ」は仁愛のこと。論語に「仁を問ふ、子曰く人を愛す」とある。「もろこし」は唐土の意で、支那の古稱であるが、こゝは、廣く外國の意味に謹解してよい。「なつかざらめや」は馴れ親しまであらうか、馴れ親しむであらうの意である。「仁愛が普く行はれたならば、外國の野に伏す虎も馴れ親しまぬことがあらうか、必ず馴れ親しむであらう」との御意と拜する。殷の紂王や秦の始皇などは、少しも仁政なく、暴虐の政治を行つたために、民心離反し、哀れむべき末路を辿つてゐる。獨り政治に於てばかりではない。一個人の上に於ても、このいつくしみといふものがなければ、德外に表はれるものではないのである。

三月五日

いたづらに時をうつしてことしあれば
あわたゞしくもたちさわぐかな

明治四十三年御製——「をりにふれて」

「いたづらに」は無駄に、無益にの意。「うつして」は過ごして。「ことし」の「し」は意味は強める語で、別に意味はない。「平常は無益のことに時間を費やして、いざ何か事があると、あわてふためいて騒ぐものである」との御意である。人間は常日頃からの心がけこそ肝要である。「泥棒捕へて縄をなふ」といふ諺があるが、一朝事ある時に、如何に周章てたところで、間に合ふものではないのである。卽ち平生から心がけて貯蓄をなし、不時の災難に備へ、衞生に注意して病氣にかゝらぬやうにし、また學問につとめて、常識を養ひ、如何なることが起つても、てきぱきと解決處理していけるやうにしなければならぬ。

三月六日

あまた度通ひなるれば遙かなる
道も遠しと思はざりけり

明治四十三年御製——「道」

「初めて通る道は、大層遠いやうな氣がするものであるが、幾度も〳〵通ひ馴れると、さほど遠くは感じなくなるものである」との御意と拜する。然しこれは文字に表はれた表面の意味で、人の道を踐むといふことは、最初のうちは、非常に苦しく困難を感ずるものである。例へば毎朝親の機嫌を伺ふことを始めようとするに、最初の間はなか〳〵その實行が困難であるが、これが毎朝つづけてゐるうちに、いつしか習慣のやうになつて、少しの苦痛も感じなくなるどころか、寧ろ愉快を感ずるに至るものである。故に最初の苦痛や困難に堪へ忍んで、常に正しき人の道を踐み、善行を積むやうに心がけたい。

三月七日

みなもとは清くすめるを濁江に
おちいる水のをしくもあるかな

明治四十三年御製――「水」

「泉から湧き出た水は、清く澄んで、些かの濁もないけれど、流れ〳〵て濁流に合し、遂に濁つた水となるが、誠にをしいものである」との御意と拝する。人も亦この水の如くである。生れた時は、神の如き清浄無垢の心を持つてゐるが、次第に成長するに從つて、種々な社會の惡い事に染り、所謂いつはり多き世の人となる。遺憾の極みである。人は常に生れた童心のやうに、死ぬるまで清浄無垢な心を持つてゐたならば、かくまでにいつはり多き世の中とはならぬであらうに。またいつはらぬ世の中であつたならば、どんなこの世が住憂い世の中とはならぬであらうに。果してその解決は難しいであらうけれども。

三月八日

ならび行く人にはよしやおくるとも
たゞしき道をふみなたがへそ

明治四十三年御製――「道」

「ならび行く人」とは、自分と同じ年生れの人、同じ業務に携はる人、學窓を同じくする人、同時に鄕里を出た人など、皆等しくならび行く人と謂ふべきであらう。「よしや」は縱令・かりに。「たゞしき道」とは人の踐むべき五倫五常の道をいふ。「ふみなたがへそ」は踏みちがへるなの意、「な」は係りの詞で、「そ」は結びの詞、合せて禁止の意味をあらはす。「自分と肩を竝べて進む人に、縱令遲れても、人間の踐むべき正道を誤らぬやうにせよ」との御諭しと拜する。同輩の立身成功を見て、目的のためには手段を選ばずの方法に出でるやうなことは最も慎まねばならぬ。

三月九日

いとまなき身も朝夕にいそしみぬ
思ひいりたる道の爲には

明治四十三年御製——「道」

「忙しい忙しいといひながらも、己が好む道には朝晩の區別なく熱心になるものである」との御意と拜する。誠に人間の心の機微を御詠じ遊ばされ給ふ。身は數多の會社に關係し、而かも議政壇上に立つ人も、好きなゴルフや圍碁などに、惜しい時間を割いてゐるのが人の常である。さういふ人は、或は「英雄閑日月あり」と嘯くかも知れぬが、さうした運動や遊戯よりも、もつと〳〵なさねばならぬ重要なことがあるであらう。思ひを茲に致さば、英雄云々と一世の豪傑を氣どることは、寧ろ恥とすべきことではなからうか。人々の熟慮思考すべきことである。

三月十日

まめやかにつかふる臣のあればこそ
わがまつりごとみだれざりけれ

明治四十三年御製——「忠」

「まめやか」は忠誠の意。「臣」は臣下。「忠誠の臣下があるので、政治も亂れない」と、畏れ多くも御謙讓の美德を御示し遊ばされた。恐懼の極みである。英明にまします　明治大帝にこの御製がある。下國民たる者、些かも專恣の行爲あるべきか。「實るほど頭のさがる稻穗かな」の諺の通り、德高い人ほど謙讓の德あらはれ、德具はらぬ者ほど、傲慢・專恣の言行があるものである。傲慢・專恣の人は、父母兄弟に疎んぜられ、朋友知己に見放され、遂には社會から葬り去られるやうなことになる。人は吳れ〳〵も傲慢・專恣を慎んで、謙讓の美德を持つやうにしたいものである。

三月十一日

ひと筋をふみて思へばちはやぶる
神代の道もとほからぬかな

明治四十四年御製――「をりにふれて」

「ちはやぶる」は神の枕詞。「神代の道」とは、畏くも教育勅語の御精神と謹解してよいと思ふ。勅語にも「斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ」と仰せ給ふ。卽ち五倫五常の道とは、言葉こそ支那から傳はつたのであるが、所謂人の道は、我が神代に既に定められてあつたものであつて、決して支那から傳はつたものでないことは、我が國の歷史が明かに證明してゐるところである。「神代の道といへば、遠いものゝやうに考へられるけれども、ひとすぢに考へるならば、決して遠いものではない。道は眼前にある」との御仰せと拜し奉る。

三月十二日

天つ神定めたまひし國なれば
わが國ながらたふとかりけり

明治四十四年御製――「國」

「天つ神定め給ひし國」とは、伊弉諾・伊弉冊尊と申す二神が、大八洲國をお生みになり、その御子神天照大神が高天原をしろしめされて、その皇孫瓊々杵尊を天降し給ひ、その後三代を經て、神武天皇は大和橿原の宮にて皇祖の御位に卽き給ふ。故にかくは宣ひしものと拜せられる。「天つ神の定め給ひし國であるから、我が國ながら尊い」との御意。げに我が大日本は神國である。この一事を、國民は等しく堅く捧持しなければならぬ思想である。我が大日本帝國は、神國であるから世界無比なのである。諸外國の如く人間と人間の集まりではないことを忘れてはならぬ。

三月十三日

世はいかに開けゆくともいにしへの
國のおきてはたがへざらなむ

明治四十四年御製——「國」

「世界の大勢に伴つて、世の中が如何に文明開化の域に達するとも、そのために、我が國の立國の大本を忘れぬやうにせよ」との御誡めと拜し奉る。西洋の科學文明が輸入されるに從つて、物質萬能の思想が漲り、唯物觀などゝいふことが熾んになり、我が國體を云々するやうな不心得者さへ出來て來たのであるが、かういふ輩は、我が國家の他の外國に超絶する所以を知らず、國のおきてを違へる者と謂ふべきである。勿論西洋の科學文明を凌駕する程の文明國たらしめなければならぬことは勿論であるが、我が國民たる者は、苟しくも教育勅語の御精神を忘れぬやうにしなければならぬ。

三月十四日

ともすれば走りがきしてわがとりし
筆の跡さへ見わけかねつゝ

明治四十四年御製——「筆」

「ともすれば」はやゝもすれば。「やゝもすれば走り書きして自分が書いた文字を、自分でわからないことがある」との御述懷と拜する。この御製を拜誦して、自分のことに考へ及ぶ時、よくあることであらう。自分さへ讀めぬ文字を、他人が讀める道理がない。かうした手紙なり、文書なりを貰つた他人が非常に迷惑するばかりではない。用件の趣きが不明のために、事業や取引きの遂行が出來ない結果となる。それのみではない。その人の人柄を疑はれて、信用上に及ぼす影響といふものが甚大なものであることに心附くならば、一字と雖も粗忽に書く可きものではない。

三月十五日

たらちねの親のをしへは誰もみな
世にあるかぎり忘れざらなむ

明治四十四年御製——「をりにふれて」

「たらちねの」は親の枕詞。枕詞といふのは、語調を調へるもので、普通は五音の形をとるものである。「世にあるかぎり」は生涯のこと。「忘れざらなむ」の「なむ」は、他に對して希望する意味の助動詞である。「日本國民たる者は皆、一生涯親の教を忘れぬやうにせよ」との御諭しと拜し奉る。近代の人々は、親といふことを輕んずる風習の生じて來たことは、甚だ遺憾のことである。親の言葉といへば陳腐舊套を脱せぬものゝ如く考へて、寧ろこれを輕蔑する不心得者さへあるに至つては、誠に言語道斷と謂はなければならない。慈愛に充ちた父母の言葉こそ、貴き教へである。

三月十六日

あさしとて心ゆるすな雨ふれば
とみにあふるゝ山川のみづ

明治四十五年御製——「河」

「心ゆるす」は油斷する。「とみに」は俄かに。「山川の水」は山中の川の意。「たかゞ山中の川である。淺いなどゝ油斷するものではない。常日頃は淺い川であるが、一朝雨が降ると、急に水嵩が增すものである」とは表面に表はれた御意で、小事とて決して侮つてはならぬとの御誡めと拜する。僅かの事を鼻にかけて、他を侮りがちなるは人間の弱點である。侮りの結果は、心に油斷を生じ、思はぬ失敗や苦杯を嘗めてから後悔しても、それは、六月の菖蒲、十月の菊である。小童の牛若丸を侮つた辨慶が、逆に牛若丸の從者となつたことは、强ち兒童の誡めとのみは見られない尊い教訓である。

三月十七日

むらぎもの心のかぎりつくしてむ
わが思ふことなりもならずも

明治四十四年御製——「をりにふれて」

「むらぎもの」は心の枕詞で、群臓腑の凝るといふ義であるといふ。「心のかぎり」は精根のつづく限り、の意味であるが、勿論力のあらむ限りの意味をも含む。「なりもならずも」は事が成就してもしなくともとの意味である。「事の成就するとせぬとは問ふところではない。心の限り、力の限りを盡さむ」との堅き御志のほどを御詠じ遊ばされた御製と拜し奉る。人生萬事、自己の精根の限りを盡さば、決して物事成就せぬといふことはないのであるが、多くの人々は、この人事を盡すことを忘れて、徒らに事の成らざるをのみ嘆ずるのが常である。これでは萬事成就するといふことは決して望み得ない。

三月十八日

きくにまづ身にぞしみける誠より
いふ言の葉は長からねども

明治四十四年御製——「をりにふれて」

「誠から發する言葉といふものは、簡單ではあるが、聞く身にはしみいるものである」と御詠じ遊ばされ給ふ。人の長となり、又は多くの人々を使用する人は、特に深くこの御製の御意を奉體すべきである。多辯冗舌がよく主人の御意に協つて、立身出世をした例は古今東西を問はず尠くないが、果してこれが名主であるか？　寡默の間からポツリ〳〵と迸る言葉こそ、眞に味はふべきものがないか？　人と人との交際に於て亦然りである。追從の徒は輕くまた廣く交際を得られる。然し果してその眞底に誠意ある交際が出來るものであるか？　靜かにこの點を考慮して見るべきではあるまいか。

三月十九日

いつはらぬ神のこゝろをうつせみの
世の人みなにうつしてしがな

明治四十四年御製——「神祇」

「うつせみの」は世の枕詞で、別に意味はない。「うつしてしがな」はうつしたいと希ふ詞である。「偽りない神の心を、そのまゝ世の人のすべての心に移したいものである」との御意と拝する。畏くも明治大帝の御製には、天眞爛漫たる童心を愛させ給ひ、山に湧き出る清水の、濁水に混ずるのを惜みさせ給ふ類のもの殊に多く拝せられる。吾等國民たる者、慎むべきは偽りの心である。神の如く正しく、神の如く明朗なる心を持つて、互にこの世に生活したならば、眞の樂土たること疑ひなく、極樂浄土も堯舜の世も亦及ばぬ世の中となることであらうに。餘りにも多き偽りの世なるかな。

三月二十日

思ふことといふべき時にいひてこそ
人のこゝろもつらぬきにけれ

明治四十四年御製——「をりにふれて」

「いふべき時」とは、いふ可き時機のことで、この御製の御主旨はここにあるのである。「己の言はむとすることが、その言ふ可き時機に云つてこそ、始めて、聞く人の心に貫徹するものである」との御意と拝する。如何なる名言・忠諫も、その時機を得なければ、何の效をも奏するものではない。例へばある事に熱中してゐる最中に、その人に對して忠告したところで、少しも耳に入らぬのみか、却つてその人の機嫌を害して、却つて反對の結果となる。少し熱中の度が薄らぎ、少し考へて來たところで、初めて忠告をすれば、忠告された人の心に強く響いて、その效果極めて偉大なものとなるものである。

三月二十一日

うちつれて渡るをみればとぶ鳥も
おもひ〳〵の友ぞあるらし

明治四十四年御製——「鳥」

「三々五々つれだつて、空を飛んで行く鳥を見れば、み空を渡る鳥にも、互に心のあつた友があるのであらう」との御意と拜する。況してや萬物の靈長たる人間には、互に心を許し合つた朋友がなくてよからうぞ。然るに今日の如く輕佻浮薄になつた世の中で、互に心を許し合ふ朋友を得るといふことは、なか〳〵困難なことである。昔支那の管仲と鮑叔、又、伯牙と鐘子期の如き友人こそは、誠の朋友と謂ふ可きである。敵となつた管仲を推薦して遂に宰相たらしめた鮑叔、鐘子期の琴の音を一々聞き分け、子期の歿後は絃を絶つて再び琴を持たなかつたといふ伯牙の友情こそは、千金にも換へ難いものである。

三月二十二日

思ひいづることのみ多し故郷の
こだちもとの木立ならねど

明治四十四年御製——「故郷木」

「故郷」は京都をさして宣うたのである。「木立」は御苑の木立のこと。「御苑内の木立は、もとの木立ではないか、思ひいでられることのみが多い」と御詠じ遊ばされ給ふ。この御製を拜誦して、吾人は故郷といふことを考へなければならぬ。故郷とは必ずしも生れた土地といふ意味ではない。最も印象の深い土地が卽ち故郷である。この故郷を思ふといふ精神が、轉ては國を愛する精神となる。游牧の民には故郷はない。同時に彼等には國家觀念がなく、何處でも自分の住む國がよい。忠君愛國の精神がない國民は卽ち游牧の民であり、漂浪の民である。故郷を愛する精神こそ貴き精神である。

三月二十三日

敷島のやまとしまねのをしへぐさ
神代のたねの残るなりけり

明治四十三年御製——「をりにふれて」

「敷島の」は大和の枕詞。「をしへぐさ」はをしへのこと。「くさ」に對して下に「たね」と仰せ給ふは緣語である。「我が大日本帝國の國家道德の淵源は、遠く神代にある」との御意と拜する。誠にこの御製の如く、我が國の道德は、早く神代に始まるもので、決して朝鮮や支那から傳來したものではないのである。忠孝・仁義とか五倫五常などゝいふ語は支那傳來のものであるが、事實は既に神代に存してゐた。卽ち天孫降臨の時、天照大神樣の御言葉によつて、君臣の分は儼然と確定せられ、父子の大道卽ち我が國體の精華たる忠孝一本の道も明かにされて、我が國道德の根本は神代から儼として存在してゐた。

三月二十四日

とこしへに國まもります天地の
神の祭をおろそかにすな

明治四十三年御製——「神祇」

「とこしへに」は永久に、永劫にの意。「まもります」の「ます」は坐すの敬語で、守護し給ふの意。「おろそかにすな」はゆるかせにすること勿れの義。「永久に我が國を守護し給ふ天地の神の祭祀をゆるかせにすること勿れ」の御意。弘安の役に、俄かに暴風が起つて、元の船が皆破船したことや、兵力・經濟に於て、遙かに優れた清國を苦もなく降伏せしめたことなどは、これ偏に神の加護によるものでなければならない。その他神武天皇の金鵄、和氣清麿の神託等、擧げ來れば、枚擧に遑ないほどである。斯くの如く天地の神の加護を享けてゐる我々國民は、朝な夕なに神の祀を怠つてはならぬ。

三月二十五日

ひろき世にまじはりながらともすれば
狹くなりゆく人ごころかな

明治四十三年御製――「心」

「この廣い世の中に生れて、どうかすると、くよ〳〵と狹い量見を持つ人もあるが、それではならぬ。廣い氣持を持つべきである」との御意と拜する。ここに注意すべきは、度量を廣く持つことゝ、徒らに放膽であることである。よく事理を辨へ、輕重を考へて、小事に拘泥せぬこそ、眞に度量の廣い人で、事理を考へず、輕重を無視し、誇大妄想を追ふは、徒らに放膽を裝ふ人である。次第に社會が複雜となるに從つて、世間の交渉が多くなり、末梢神經を刺擊するために、小心翼々の徒となりがちであるから、沈著にして度量の大きい人となるやうに心がけなければならぬ。

三月二十六日

をさな子にひとしくなれる老人を
いたはることをゆるかせにすな

明治四十三年御製――「老人」

「幼子と等しくなつた老人を劬はることを怠つてはならぬ」との御諭しと拜する。俗諺に「老人は小兒である」といふことがある。老人になれば、誠に子供と同じやうになるものである。故に老人は自分より年若い者から慰められ、劬はれることを非常に喜んで、生活の一大慰安となる。祖父母や伯叔父母を敬ひ劬はらなければならぬことは勿論である。のみならず、電車などに乘つた場合やその他の場合に於て、老人に席を讓つて、安樂にさせ、或は坂道などにかゝつた場合には、その荷物を持つてあげるやうにしたならば、そこに美しい道德の花が咲き、敬老の美德が顯はれて、誠にゆかしく見えるものである。

三月二十七日

人みなのえらびしうへにえらびたる
玉にもきずのある世なりけり

明治四十三年御製——「玉」

「世の中の人々が大勢で選びに選び、これならば完全無缺な玉であるとしたものでも、なほ善く檢すれば、矢張り何處にか必ず瑕があるものである」とは、表面に表はれた御意で、「世の中に完全無缺なものはないものであるから、人の些〻たる短所を見て批難したり、甚しきは、その人の長所をも捨てるやうなことはせぬやうにせよ」との御意と拜する。如何に名臣賢將と仰がれる人でも、或は一村一縣の模範たる人でも、嚴密な意味に於ては必ずや何處かに短所があるであらう。人各〻皆多少の缺點や短所のない人はないのであるから、短所を擧げず、その長所を採るやうにしたいものである。

三月二十八日

みじかくてことの心のとほりたる
人のふみこそ讀みよかりけり

明治四十三年御製——「文」

「文章が簡潔で、而もその眞意のとほつてゐるものが讀みよいものである」との御意と拜し奉る。社會が複雜になつて來るに從つて、ます〳〵文の簡潔といふことが要求される。何故ならば、日々の業務が凡て事務化して、多忙を極めるからである。かうした世の中に、くだくだしい文章で、徒らに美辭麗句を連ねた手紙などを貰ふ人こそ迷惑である。而もその文字が拙く、迚も讀めさうもない字である場合は、その迷惑の度が大きいわけで、お互に無駄な時間を費すのみならず、取引上に支障を來し、場合によつては大きな損失を蒙る場合がないとも限らぬのであるから、お互に注意しなければならぬ。

三月二十九日

いそのかみふるごとぶみは萬代も
さかゆく國のたからなりけり

明治四十三年御製——「書」

「いそのかみ」は「ふる」の枕詞。「ふるごとぶみ」は古事記のことである。古事記は、天武天皇が稗田の阿禮に勅して、帝紀及び上代の舊事を誦せしめられたのを後に太安麿がこれを筆錄して、和銅五年に三卷の書とした。我が國の建國の精神やその他を知るに最も善い書物であるから、國民たる者は一度は讀んでおく必要がある。古語があつて、少し難解の箇所もあるが、近來註釋つきで、誰にも讀めるやうに出來てゐるものがあるから、決して專門の書ではなくなつた。そこで　明治大帝陛下は「古事記は萬代も榮えゆく我が大日本帝國の寶である」と仰せ給ふ。洵に感激に堪へぬ御製である。

三月三十日

おのが身はかへりみずして人のため
盡すぞひとの務なりける

明治四十二年御製——「義」

「己れ一身の利をかへりみずして、人のために犧牲となつて盡すのが人間の務である」との御意である。孟子も「生も亦我の欲する所也。義も亦我の欲する所也。二者兼ね得べからず。生を舍てゝ義を取る者也」といつて、犧牲的精神の鼓吹に努めてゐる。現代の如く個人主義が熾んな場合には、犧牲的精神や行爲がその影を沒する。單に自己のための利益のみを考へて、他人のため、國のためといふ精神が薄らぎがちで、所謂我利々々の徒が橫行して、社會に醜い形を表はす。慨嘆の至りと謂ふ可きで、これは却つて自己を滅ぼす原因となるものであるから、くれぐも愼むべきことである。

三月三十一日

すゝみゆく世におくれなばかひあらじ
文の林はわけつくすとも

明治四十二年御製——「寄書述懷」

程子の言葉に「論語を讀み、讀了して全然事無き者あり」と謂つたやうに「よし讀書をしても、眞にその書物の意味を解することなく、世の進歩に伴はぬやうでは、何の甲斐もない」との御意と拜する。最近の讀書は、單に讀んで記憶しておくといふ傾向があつて、實踐といふことは極めて輕んぜられてゐるために、學問を生かして用ゐるといふことが出來ない。それがために、學校から新しく社會に送り出される人人が、都合よく職にありつけない場合には、學問をたゞ腦中に死藏して、社會から置き去りを食ひ、空しく年月を過すといふ悲運に陥かねばならぬ。故に修得した學問を活用することを忘れてはならぬ。

四月一日

沈むかとみれば浮びぬ波あらき
磯こぎめぐる海士の釣舟

明治四十二年御製——「船」

「海士」とは漁人のこと。「磯の荒波のうねりくねるまゝに、或は波にかくれ、或は姿をあらはして、波とたゝかつてゐる漁船よ」との御意。この御製を拜して吾人は深く考へさせられるのである。何故かならば、吾人の行路も亦この漁船の如くであるからである。社會の大波に揉まれ〳〵て、或る時はどん底に沈淪して、生死の境涯を彷徨し、また或る時は運命の波に乘つて、黄金の中に微笑む時もある。この苦樂常なき世の中にあつて、弱き者はその進路を誤つて落伍者となり、強き者は益〻その意志を強うして、人格を磨き、業績を擧げて、遂に榮譽を贏ちうるに至る。噫人生亦多難なる哉。

四月二日

大空を心のまゝにとぶ鳥も
やどるねぐらは忘れざるらむ

明治四十二年御製——「鳥」

「大空を心のまゝに自由に飛びまはる鳥でも、己が宿る塒だけは忘れないであらう」との御意である。表面極めて簡單のやうに拜されるけれども、その內面には貴き御教訓が含まれてゐると恐察されるのである。卽ち一鳥類でさへ己が宿るべき塒を忘れぬ。況してや萬物の長たるべき人間が、己の住する家や國を忘れてならうか、忘れぬやうにせよとの御心と拜し奉る。家を忘れ、國を忘れる不心得者がないと誰が斷言し得るか。往々社會に家を忘れて妻子眷族を放り、游牧の民の如く諸國を放浪する人をまゝ見受けるのであるが、斯くの如き人は人生の意義を解せぬばかりか、鳥にも劣る人と謂ふべきである。

四月三日

くろがねの的いし人もあるものを
つらぬきとほせ大和だましひ

明治四十一年御製——「きりにふれて」

「くろがねの的いし人」とは、的戸田宿禰をいふ。上の句は、仁德天皇の十二年に、的戸田宿禰が、高麗から獻じた鐵の盾の的を、高麗人等が見てゐる前で、射通したといふことが日本書紀といふ書物に書いてあるが、その故事のことである。「鐵の盾の的を射貫いたといふ的戸田宿禰のやうな人さへある。何事も成らぬといふことはない。一心こめて大和魂の貫徹に努めよ」との御意と拜する。この御製を拜誦して奮然起たぬ者は人間に非ずである。如何なる惰夫と雖もこの御製を拜誦して奮然蹶起するところがなければならぬ。一日と雖も偷安を貪る者があらば、慚死すべきである、緊褌一番せよ。

四月四日

學びえて道のはかせとなる人も
をしへのおやの恵わするな

明治四十一年御製——「師」

「はかせ」は學術の蘊奥を極めた人をいふ。「をしへのおや」は、その師を親に喩へ給ふ。「その道の蘊奥を極めるとも、なほ舊師の恩を忘れぬやうにせよ」との御諭しと拜し奉る。現代に於ける師弟の關係といふものは殆んどその影を沒したといふも過言ではあるまい。學校教育は職業化し、商工業にあつては、雇傭關係化して、その間に、美しい師弟の情がなくなつた。學校は月謝さへ拂へば通へるものと思ひ、商工業では、勞力を提供して賃銀を貰ふだけであるといふやうに考へられるに至つた。從つて業成つた曉においても、己れの力で大成したのであると勞へるやうになつたのは、嘆かはしい限りである。

四月五日

國のため高きほまれを得し人の
身をあやまたむことなくもがな

明治四十一年御製——「述懷」

「國のために力を盡して、高い名譽を得た人が、心驕つて、却つて邪道に這入らぬやうにあれよ」と御諭し給ふ。幸運の軌道を走る時、兎角人間は心に驕りが生じ易いものである。その結果は他を輕蔑して暴慢の振舞をなしたり、勢に乘じて邪道に踏み迷つて、顚落の憂目を見たりすることが決して珍らしくない。人間に驕慢の心が生じたならば、その人の將來は其處で停止したものと思つてよいのである。「實るほど頭のさがる稻穗かな」といふ諺があるやうに、一歩々々名實成るに從つて、ます〳〵謙讓・恭謙の心があつてこそ、その人はます〳〵將來ある人と謂ふ可きである。愼むべきは驕慢の心である。

四月六日

千萬の民の力をあつめなば
いかなる業も成らむとぞ思ふ

明治四十一年御製——「述懷」

「千萬の」は數の極めて多いことをいふ。「萬民が一致協力したならば、どんな事でも成功せぬといふことはないと思ふ」との御意と拜し奉る。國民の一致協力といふことは、その國を愛するといふ心から始まるもので、愛國の心なければ國民の協力は望まれない。ユダヤ人に一致協力のないのがそれがためである。彼等には國家觀念がない。たゞ自己あるのみである。故に彼等には國民の協力などゝいふことは藥にしたくもないのである。吾人は日本といふありがたい國家の下に同じ生を享けた同胞である。互に一致協力して扶け合ふといふことが我等國民の義務でなければならない。

四月七日

千萬のたみのちからを集めてぞ
國はゆたかになすべかりける

明治四十四年御製——「民」

「千萬は」數の多いことを意味する。「幾千萬の國民の力を合せて、いよ〳〵國を富ませよう」との御意と拜し奉る。吾等國民はこの　明治大帝の御心を奉戴して、冗費は一錢たりとも省くやうにし、一面には刻苦精勵して積極的に貯蓄を行つて富をつくるやうにする。卽ち個人豐かなれば、國家も亦從つて富國となる。悲しい哉我が大日本帝國は、强國といふ點に於ては、世界に誇り得るのであるが、富國といふ點に於ては、未だ世界に誇るべき地位に達してゐない。殊に自然の物產に乏しい我が國は、加工品によつて海外に發展しなければならないのである。

四月八日

さくらさく春なほ寒しみよし野の
吉野の宮の昔おもへば

明治三十七年御製——「思古宮」

「みよしの」は吉野と言ふための序である。「吉野の宮の昔」は延元元年十二月に、後醍醐天皇潛かに吉野に行幸あつてから、數代吉野の行宮で帝位を保ち給ひしことを申す。當時吉野の南朝の威風がおほむね振はなかつたことをおぼしやらせ給うて、「春なほ寒し」と悼ませ給へるのである。一天萬乘の尊き大君にあらせられながら、賊徒足利尊氏の反逆のために、如何に御軫念あらせられ給うたことか。南北朝時代の歴史を通讀する時、轉々感慨に堪へぬものがある。さるにても楠公父子の誠忠は、畏れ多くも後醍醐天皇の御心を、どんなにか休め奉つたことであらう。

四月九日

水をさへみづからかひてものゝふは
手馴の駒をいつくしむらむ

明治四十四年御製——「馬」

「水をさへみづからかひて」は人に任せずして自分自ら馬に水を飲ませることをいふ。「ものゝふ」は武夫、ここは兵士の意味。「手馴の駒」は己の乘り馴れた馬をいふ。「いつくしむ」は可愛がる・いとほしがる意。「兵士が人に任せず、自分自ら馬に水を飲ませて、自分の乘り馴れた馬を可愛がることであらう」との御述懷である。愛を以て人に接しなければならぬことは勿論であるが、獨り人間に對してのみではなく、他の動物や植物に對しても亦愛の心を持つて接すべきである。さうすれば、生きた動物は勿論のこと、植物までが、その愛される人の心のままになるものである。

四月十日

世を治め人をめぐまば天地のともに久しくあるべかりけり

明治二年御製――「祝」

この御製は明治二年八月三日、右大臣三條實美公を以て、英國皇太子ヂューク・オブ・エヂンボロー王子に贈り給うたものである。「天地のともに」は、天地と共にといふことが普通であるが、天地のともにといふことの格は萬葉集などにも例がある。政治の誠を盡さば、天地と共に壽久なるべき旨を示させ給うた御歌である。吾々國民も亦この仁愛といふことを忘れてはならぬ。仁愛を平易に云へば「めぐみ」である。人に恩惠を施すといふことである。人に恩惠を施すことは、決して人のためではない、皆自己のためである。己の心を豐かならしめ、己の人格を高める所以であるのである。

四月十一日

開くべき道はひらきてかみつ代の國のすがたを忘れざらなむ

明治四十五年御製――「をりにふれて」

「かみつ代」は上代・古代の意味である。「國の文化を進めるだけ進め、開くべき道は十分に開くと共に、上代の姿、(卽ち我が國は神國であつて、君臣の義・父子の親・夫婦の別・長幼の序・朋友の信の如きは、文字こそなかつたが、事實は儼然として存在してゐたので、これ等の人倫を申すことと恐察し奉る)を忘れぬやうにせよ」との畏き御諭しと拜する。殊に日本人は新奇を好む習癖があつて、新しい文物・思想に觸れると、過去のものは凡て古い〳〵と云つて顧みない傾向がある。如何に古くとも美しきものは萬代の後までもこれを存し。新しくとも惡しきものはこれを採り入れてはならぬ。その正しい批判が肝要である。

四月十二日

身をすてゝいさををたてし人の名は
國のほまれと共にのこさむ

明治四十五年御製——「をりにふれて」

「いさを」はてがら・勳功の意。「國家のために、身をさゝげた人の名を、國の榮譽と共に、永久に殘し傳へよう」との御意と拜する。このありがたき御意を拜しては、我が帝國の軍人は、喜び勇んで、君國のために身を捧げるであらう。また東京九段坂上なる靖國神社に祀られてゐる護國の英靈も、地下に感激の涙を流してゐることであらう。ひとり戰死者のみでなく、一般に國家の功勞者の英靈に對しては、國民が等しくこれを崇拜して、苟しくも粗忽なる言動があつてはならない。代表的なものとしては水戸黃門・吉田松陰等及びその他の人々は維新の原動力となつた點に於て、戰死者と等しく尊崇すべきである。

四月十三日

百年を經たる人をもみつるかな
車とゞむるところ〳〵に

明治四十五年御製——「旅」

「車をとどめるところ〳〵に、百歲を經たやうな老人を見ることである」と敬老の大御心を御現はし遊ばされた御歌と拜し奉る。近來の青年の頭から、この敬老の精神が大分薄らいで來たやうである。老人といへば過去の人の如く考へ、寧ろこれを輕蔑する傾向さへあるのであるが、甚だ遺憾の限りである。かうした考への青年が若しあるならば、今日からさうした過つた考へを改めて、敬老の精神を持たなければならぬ。畏れ多くも上皇室に於かせられても、最近に於て八十歲以上の老人には、特に御下賜品などを賜はつて、敬老の大御心を御示し遊ばされ給ふのである。

四月十四日

なぎぬればかくもなぎけり島山も
こゆべくみえし沖つしらなみ

明治四十五年御製——「海」

「なぐ」は平穏になるをいふ。「沖つしらなみ」は沖の白波の意。「荒れる時は怒濤をさかまいて荒れるけれども、凪いだ時は又斯くの如く靜かになるものである」との御意。この御意を人事に就いて考へて見るに、人も亦この白波のやうに、時には放膽な人に見えたり、惡人のやうに見えたり、またこれと反對に、非常に謹嚴な人のやうに思へたり、善人に見えたりする場合がある。然しこれはその人の全的人格を表はす場合とは限らない。人はその極端な半面のみが表れる場合がある。故に人はその一部分をのみ見て、その人の人格を批評すべきものではない。況んや惡い半面を印象づけられた場合に於ておやである。

四月十五日

一村と思ひし雲のいつのまに
あまつみそらをおほひはてけむ

明治四十五年御製——「雲」

「一村」は一群で、ひとかたまり。「初めはたゞ一群出たと思つた雲が、いつのまにか空一ぱいにおほつてしまつた」との御意と拜する。人間の行爲も、何これば かりのことがとか、この位ならまだそんなに惡いことはないなどゝ氣をゆるしてゐると、惡は次第々々に浸み込み、良心はだん〳〵痲痺して、遂には平氣で惡事をするやうになるものであるから、不善は些細な事であつても、嚴にこれを戒め避けなければならぬ。「一城の崩れるのも蟻の孔から始まる」とは昔からの格言であつて、かの大正の初めに於ける世界大戰も、ハンガリーの一青年の爆彈にその端を發してゐるではないか。

四月十六日

まつりごときゝをはりたるゆふべこそ
おのが花みる時にはありけれ

明治四十五年御製——「花見」

「まつりごと」は政治。「政務をみそなはされて、夕方からが、花を賞する時である」との御述懷と拜する。上御一人すら、御一日の御政務を終へさせ給うてから花を賞させ給ふ。下國民たる者は、一日の業務を休んで觀櫻會を催すが如きは、何とも畏れ多いことである。殊に花見る人は幾萬を數へるほど出るのであるが、その中で眞に花を賞する心持で花見をする人は、果して幾人あるであらうか。酒に醉うて狂氣亂舞する醜態を演ずることが花見であるかの如く考へてゐる人さへあるが、不見識も亦甚しいと謂はなければならぬ。一日の業務を終へて靜かに花を賞することこそ望ましいことである。

四月十七日

すがのねのながき春日はなかゝに
ものに怠る人ぞおほかる

明治四十四年御製——「春日」

「すがのねの」は長きの枕詞。「すが」はすげに同じく、茅に似て滑かで、毛のない草である。すがの根は長く亂れてはびこるところから、長の枕詞として用ゐる。「なかゝに」は却つての意。「春の長い日は心に油斷があるから、却つて物事を怠る人が多い」との御意と拜する。人は常に心にゆるみがあつてはならぬ。春の日も冬の日も差別をつけることなく、毎日心の緊張を保持してゐるべきである。心に油斷をしてゐる間に、月日は矢の如く過ぎて行き、不慮の災難は遠慮なく突發するものである。その場合に臨んであわてふためいたところで、既にその時は間に合はぬ。

四月十八日

なつかしき朧月夜のかげふみて
たゞずむ袖にちる櫻かな

明治四十四年御製——「月前落花」

「たゞずむ」は暫時立ちとゞまる義。「なつかしい朧月夜の影をふみながら、月を賞し、花を眺めてゐるうちに、落花片々として袖にふりかゝる」との御意。優しくもうつくしき御歌である。三日見ぬ間に、人に惜まれながらひら〳〵と散りて行く花は、人に何を教へるであらうか？　人の一生も亦花の如くではないであらうか。五十年六十年の人生は、決して長いといふことはできない。この人間の短かい一生の間に於て、爲すべきことは無限にあるのである。嵐が吹かぬ間に、一日も早く人間の完成といふことを全うしておかなければ、人間と生れた意義がないであらう。

四月十九日

うつせみの世はやすらかにをさまりぬ
我をたすくる臣のちからに

明治四十年御製——「述懷」

「うつせみの」は世の枕詞。「世の中が無事泰平に治まつて行く、それは朕を輔ける臣下の力によつて」と御謙讓遊ばされ給ふ御製である。畏しとも畏き極みである。一會社・一村・一縣の長たる者、この　明治大帝の大御心を拳々服膺したならば、その治蹟、必ずや大いに見るべきものがあらう。一會社の隆昌はこれ皆社員の努力の　賜　であると、心から感謝を捧げる重役は少ないであらう。故に社員はその日暮しの月給稼ぎとなる傾向を帶びて來る。また宜べなる哉である。人は己の手腕や技倆を誇る前に、先づ社會に感謝し、部下の勞力を認めて、然る後に己を三省して見るべきである。

四月二十日

世の中をおもふたびにも思ふかな
わがあやまちのありやいかにと

明治四十年御製——「述懐」

「國家の政務を釐はすに、もし御過誤の事もあらむかと、世の中を思ふたびに思ふことである」と御躬らを省み給ふ大御心の御發露と拜し奉る。吁!!何んと恐れ多い御歌であらうか。一天萬乘の大君にして、かくまで省察の御德を御あらはされ給ふとは。下々の我等國民は一日に三省四省のことあつて然るべきである。過ち易きは下々の我々凡人である。一言一行と雖も嚴密なる批判と反省を繰返して、自己の言動に過失なきことを期すべきである。孔子も論語に於て「吾日に吾身を三省す」といつて、我が身をしば〳〵かへりみて、過なきかを思ふことを敎へてゐる。眞に服膺すべき言である。

四月二十一日

ものごとに進まずとのみ思ふかな
身のおこたりはかへりみずして

明治四十三年御製——「をりにふれて」

「自分の怠慢をも考へずして、物事が進捗しないことだけを思ふことである。故に物事が進まぬ時は、自身の怠慢を省みよ」と御諭し遊ばされた御歌と拜する。失敗を招いだり、損害を蒙つたりした場合に、その罪や原因を他人に轉嫁したがるのは人間の弱點である。そして自分の責任や努力を棚に擧げて、更に顧みない。凡人のあさましさである。殊に人の監督をする立場にある人などは、かうした傾向を持つものである。己の監督不行屆の點は更に考へずに、部下の失態だけを數へあげるのが常であるが、一歩進んで、自分の責任なり、監督なりを靜かに反省して見る必要が大いにあるのではないか。

四月二十二日

きくたびにゆかしきものはまつりごと
正しき國の姿なりけり

明治四十三年御製――「をりにふれて」

「海外の國でも、政治の正しい國ぶりを聞しめす毎にゆかしく思召す」との御意と拜し奉る。個人に於ても亦一國の如くである。節婦・孝子の話や忠勇義烈の話などを聞く時は、胸が高なりして、極めて愉快なものである。又、言行のつゝましく、誠實な心の人と對談する時も亦氣持のよいものである。勿論かうしたことは一朝一夕に出來るものではないが、修養するならば、決して出來ないことではない。よく世間には美衣美服を纏つて、大邸宅に居住しながら、對談して見ると、案外なことも決して少なくない。心を美しく持つことが卽ち外見にあらはれて、その反映が對手に好感を持たしめるのである。

四月二十三日

さだめたる國のおきてはいにしへの
聖の君のみこゝろなりけり

明治四十三年御製――「をりにふれて」

「聖の君」は聖天子の義で、御祖先の天皇を宣ふ。「我が大日本帝國に定められた國のおきては、皇祖皇宗の御遺訓である」との御意と拜する。「おきて」と申すは教育勅語の御精神と解し奉つて然るべきである。教育勅語に「斯ノ道ハ實ニ我ガ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ云々」と仰せ給ふ。我が國體の精華は、決して後代に定められたものではなく、既に神代に於て定められたものであることは、古事記・日本書紀などの書物を讀んで見ると頷かれるのである。日本の建國精神といふことが近來盛んに言はれるところであるが、國のおきてといふのは、建國精神をいふのである。

四月二十四日

ちよろづの民の心ををさむるも
いつくしみこそ基なりけれ

明治四十三年御製——「仁」

「ちよろづの」は數多い意。「いつくしみ」は仁愛。「幾千萬の國民を治めるには、仁愛が根本である」と政事の要諦を御詠じ遊ばされた御歌である。ネロや秦の始皇の如きはこの仁愛がなく、暴政を以て國を治めたために、哀れなる末路を辿つたのである。一個人にあつてもその通りである。同情・愛といふ心がなく、我利々々を發揮するならば、さういふ人は社會から見捨てられて、遂には親兄第からも見放されて孤立無縁となり、養老院の一室に一命を終らなければならぬといふやうな悲しむべき境遇となるのである。人を愛することは、とりもなほさず己を愛する結果となるのである。

四月二十五日

ならびたつたけはひとしく見えながら
このかみは猶このかみにして

明治四十三年御製——「兄弟」

「このかみ」は兄の古語である。「兄弟が竝び立つた身の丈は同じやうに見えるけれども、兄は矢張り兄である」と悌恭の精神を御諭し遊ばされた御歌と拜する。兄は知識に於て、身體に於て、或は人間として、將又社會的地位に於て、必ずしも弟より優れてゐるとは限らないのである。否寧ろ「總領の甚六」といふ世俗の諺が裏書される事實さへあるのであるが、然し弟が兄よりも社會的地位が高くとも、又は知識に於て勝れてゐても、兄は兄、弟は弟としての道は儼然として存してゐるのである。縱令經濟的に兄を援助しようとも、弟たる者が兄を輕んずるやうな言動があつてはならぬのである。

四月二十六日

外國におとらぬものを造るまでたくみの業にはげめもろ人

明治四十三年御製——「工」

「たくみの業」は工業。「外國品に劣らぬものを造るやうに、工業を勵めよ、國民」と、我が國の工業を御奬勵遊ばされた御製である。明治年間になつて外國から來た工業は多く、これを學ぶに日猶淺いために、まだ〳〵外國品を凌駕する域には達してゐない。鐵工業・自動車工業・飛行機にしても、或は製紙・印刷業に至るまで、諸外國のそれと比較するに、なほ遜色のあることは否まれない。中には外國品を凌駕するほどのものもあるが、然し我等國民は何時までも外國品を崇拜してゐる時ではない。我が日本の生産物が、

四月二十七日

をさめしる國のはてまでしらせばや民安かれと思ふこゝろを

明治四十三年御製——「述懷」

「をさめしる國」は統治し給ふ國の義。「民安かれと思ふ心を、統治し給ふ我が大日本帝國の果てまでも知らせたい」との、民政に大御心をつくし給ふ畏き叡慮のほどを御詠じ遊はされた御製である。上にはかくまで明君を戴き、世界に冠絶せる國家に生れた吾等國民は、何たる幸福なことであらう。心からなる感謝を捧げなければならぬ。徒らに歐化主義を唱へて、自國を卑下することは、國民として取らざるところである。若し日本が彼等の云ふ如く、西洋諸國に比して甚しく卑下するところありとせば、互に奮鬪努力して、西歐に劣らぬ國とするのが、大日本帝國の臣民として何よりも急務ではないか。

四月二十八日

むらぎもの心にたえずおもふこと
なしとげし日ぞうれしかりける

明治四十三年御製——「述懷」

「むらぎもの」は心の枕詞。「一生のうちに必ずあれをやつて見たいと、絶えず念願してゐることを、成し遂げた日が、誠に愉快なものである」との御意と拜する。少年時代には或る學校に入學を念願してゐて、入學試驗をパスした時の愉快さ嬉しさ。學校を出て自分が希望する業務に就いたときの喜び、永年計畫し苦心慘憺の結果、これを實現した時の心持、何んとも云へぬ喜びに充されるものであることは、經驗者のよく知るところである。人間は一生のうちに、かうした喜びを幾回も經驗することであらうと同時に、失

四月二十九日

世の中の人のかゞみとなる人の
おほくいでなむわが日の本に

明治四十三年御製——「鏡」

「かゞみ」は手本。模範などの義。「いでなむ」の「なむ」はいでよかしと希望の意を表はす詞である。「世の中の人の模範となるやうな立派な人が、この日本の國に澤山いでよ」との御意と拜し奉る。我が國に世界的な偉人・賢人・武將が澤山輩出したならば、どんなにか我が國民の誇り、國の名譽となることであらう。そして世界の文化が日本を發祥地として、各國に普及するやうになつたならば「光は東方より」といふことも完全に實現されるのである。我等國民は　明治大帝の大御心を奉戴して相提携し、物質・精神の兩文明の淵源地となすやうに心がけなければならぬ。

四月三十日

くつがへることもこそあれ小車の
進むにのみはまかせざらなむ

明治四十三年御製――「車」

「小車」の「小」は接頭語で、小さいといふ意味ではない。「くつがへることもあるかも知れないから小車の進むにのみまかせぬやうにせよ」との御意と拜する。この御製には「若い青年達はともすればあらぬ道に踏み迷うて、一身を誤るやうなことがないとは限らぬものであるから、長者なり兩親なりが注意をして進むべき道を誤らぬやうにせよ」との御諭しと恐察し奉る。青年は血氣にはやつて、思慮を缺き、たゞ猛進する傾向があるから、よく經驗者なり、長上の意見をたづね、その忠告に從つて己が行くべき道を誤らぬやうにすべきであつて、己の力を過信してはならない。

五月一日

おごそかにたもたざらめや神代より
うけつぎ來たるうらやすの國

明治四十三年御製――「國」

「たもたざらめや」は保たずしてあらむやの意で、嚴かに保有して行かうとの義である。「うらやすの國」は日本の別名。「うら」はうらさびし、などの「うら」と同じく心の義で、國土ゆたかに安らかな國のことである。「神代から皇系一統にして承け繼ぎ來ませる日本の國を、嚴かに保有して行かむ」との御意と拜する。これを一家にして見るに、先祖傳來の家風と財産といふものがある。これを固く守つて、その家の繁昌を計らなければならぬ。若しそれを失ふことあらんか、先祖に對して不孝となる。これを大にしては、一國の消長に關はる。一家を治める者は必ず一國を護る者である。

五月二日

暮れぬべくなりていよ〳〵惜むかな
なすことなくて過ぎし一日を

明治四十三年御製——「夕」

「なすこともなくして過ぎた一日を、日の暮れ方になつてます〳〵惜まれることである」との御意。一日を惜んで務め勵んだならば、どんな學業も業務も成らぬといふことはない。又、貧苦に惱むといふやうなことはないのである。働くにも職業がないと愚痴る人、貧苦に惱む人は、一日を惜むといふやうな眞劍な心持が缺けてゐるのではないであらうか。必死の努力を以て職業を探したならば、決して探し得ない道理はない。たゞ自己の欲する職業はなくとも、本統に働くといふ氣持になれば、次第に欲する職業にも轉ずることも出來るし、從つて貧苦を脱することが出來るのである。

五月三日

ひらくれば開くるまゝにいにしへに
かはるおもひもある世なりけり

明治四十二年御製——「述懷」

「世の中が開ければ、開けるに從つて、昔とは變つた思ひもある世である」との御述懷と拜する。世の文化の發達進歩に伴つて、新しい機械や發明品も出來て來るし、又、思想や道德・宗教などの凡ゆる方面に於て、昔とは變つて來る。明治の半頃までは見られなかつた飛行機や大正の末に施設されたラヂオなどの如き文明の利器が、年と共に生れて來る。從つて思想方面に於ても、明治以前と明治以後、更に大正・昭和の今日とを比較して見るに、大きな相異のあることに心づくであらう。然し我が國には二千五百有餘年の間、一貫して變らぬ國體の精華と日本精神がある。

五月四日

吳竹のなほき心をためずして
ふしある人におほしたてなむ

明治四十二年御製――「教育」

「吳竹の」は直きの枕詞。「教育の要は、人々の直き心を強ひて矯めないで、しかも一ふしある優れた人に育てるにある」と、教育の根本を御示し遊ばされた御製と拜し奉る。今日の劃一教育の打破が叫ばれてゐるのも、所以あると謂ふ可きであらう。教育といふのは、必ずしも學校教育のみを指すのではない。家庭教育も亦學校教育と歩調を合せて行ふのでなければ、完全なる教育とは謂ひ得ないのである。學校教育は、教師に任せるとしても、各家庭に於ては、己の子や弟達を、自己の考の型に嵌め込むことをせぬやうに、その子本來の長所を抽出するやうに指導すべきである。

五月五日

世の中にひとりたつまでをさめえし
業こそ人のたからなりけれ

明治四十二年御製――「寶」

「獨立して終世の進路を開くべき業を修め得たことは、人の寶である」との御意と拜する。一の職業を以て世の中に生活する人は、振り返つてその職業を授けられた人を再び思ひ返す必要がある。人の家に雇はれて職業を得た人は、その主人なり、師匠なりがあるであらう。又、學校を卒業した人は教師があるであらう。それ等の人々が自分を指導して吳れたために、今日社會に立つて獨立して居られるのであることを考へたならば、元の主人や教師に對して感謝の心を捧げなければならぬ筈である。親の恩にも等しい廣大な恩を受けてゐるのである。

五月六日

あらし吹く世にも動くな人ごころ
いはほに根ざす松のごとくに

明治四十二年御製――「巌上松」

「岩に根ざす松のやうに、一時の風潮に心を動かさず、堅忍持久せよ」と御諭し遊ばされた御製である。

「日本人はフランス人と同じく、一時の風潮に動かされ易い心を持つてゐると思はれてゐる。即ち感じ易く激し易い性向を持つてゐるのである。故に社會主義の風潮が押し寄せて來れば、忽ちその方に靡き易く國家主義が流行すれば、忽ち一變して國家主義に趨り易い。これでは根のない浮草のやうで、風のまにまに吹き流されてゐるやうなものである。これではいかぬ。苟も日本國民たる者は日本精神を胸奥深く把持して、如何なる風潮に遭ふとも微動だもしないといふ態度を持たなければならぬ。

五月七日

よきをとりあしきをすてゝ外國に
おとらぬ國となすよしもがな

明治四十二年御製――「國」

「長所は國の東西を問はずこれを採り、短所は自國のものであつても固執することなくこれを捨てゝ、遂には諸外國に劣らぬ立派な國家たらしめよ」との御諭しと拜する。明治維新後の西洋文化が急激に輸入されたので、我が國民は無批判的にこれを採り入れた傾向はなかつたか。最近の反動思想はこれを雄辯に物語るものではなからうか。各自大いに熟慮する必要がある。又各自もよく己の長所短所を悟り、人の短を言はず、己の長を誇ることなく、採長補短の精神を持つて、短所と心づかば、直ちにこれを改め、他人の長所を認めるならば、その人の如何を問はず、これを採つて、己の短を補ふやうにしなければならぬ。

五月八日

國民もつねに心をあらはなむ
みもすそ川の清き流に

明治四十二年御製——「河」

「あらはなむ」は洗へよかしと嘱望し給ふ辭である。「みもすそ川」は伊勢神宮の神域を流れる川である。「國民も常に神祇を尊崇して、その心を清めよ」と御諭し遊ばれ給ふ。こゝに甚だ遺憾なことは、神國日本に生れて、神の存在すら覺らぬ人々があることである。殊に近代の青年に然りである。たゞ〳〵物質と享樂あることを知つて、神あることを知らぬとは、慨嘆の限りである。神國日本の國民として恥辱の極ではないか。この神の存在を信じなければ、眞に心を清めるといふことは覺束ない。神を知り、靈を知つて始めて人間の誠といふことが了解出來るのである。

五月九日

ふりにきと人はいへどもはやくより
すめる家こそすみよかりけれ

明治四十二年御製——「家」

「ふりにき」の「にき」は過去の辭で、古くなつて終つたの意。「はやくより」は以前から。「もう古くなつてしまつたから（改築をと御勸めまゐらせる）と言ふが、以前から住んでゐる家の方が住みよいものである」と、堅實・質素の大御心を御詠じ遊ばされた畏くも畏き御歌と拜し奉る。畏れ多くも戊申詔書の中に「醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ」と仰せ給ふ。衣は以て寒さを凌ぐに足り、家は以て雨露を凌ぐに足るものである。大廈高樓に贅を盡し、粉黛美裝を凝らして有閑に苦み、その害を社會に流す者あらば、陛下の御詔に反く不忠の臣民と謂はなければならぬ。

五月十日

ちりひぢのかゝる草葉にやどれども
露の光はくもらざりけり

明治四十二年御製——「露」

「ちりひぢ」は塵埃のこと。「露が塵埃のかゝつてゐる草の葉にやどつてはゐるが、而も露の光が少しもくもつてはゐない」との御意と拝する。何と清らかな露の光であらう。人も亦斯くありたいものである。濁つた社會、汚れた環境に這入つても、毅然としてひらめく人格を持ちたいものである。人は多くその環境に支配され易く、濁つた社會に這入れば、何時とはなしにその濁りに染まるものである。そして自己が矢張り濁つた社會に入つてゐることを自覺せぬやうになるのが常である。悲しむべきことである。あの泥中の蓮葉を見よ。泥中から生じても清楚・清廉そのものではないか。

五月十一日

世の人にめでらるゝまを時として
風をも待たず花のちるらむ

明治四十二年御製——「落花」

「めでらるゝ」は賞せられる、觀賞される。「時として」は時機・時代として。「花は世の中の人に觀賞されたのをわが時代として、風に吹き散らされるをも待たずに散つて行くことであらう」との御意と拝する。人も花のやうに國の譽となり、人の鑑となつて人から賞められるやうにならなければならぬ。路傍の野草のやうに、たゞ春芽を出して、花を開き、秋に枯れ果てゝしまふ花に較べれば、假令その開花の期間が短くとも、人に賞され惜しまれて散り行く櫻花が、どんなにか意義深く、又價値あることであらう。よし短命に終るとも、誠の人間となることこそ望ましい限りである。

五月十二日

わが心われとをり〳〵かへりみよ
しらず〳〵も迷ふことあり

明治四十一年御製――「をりにふれて」

「自分の心を、自分の本心にたちかへつて、時折顧みなければならない。さうしなければ、知らず識らずの間に邪道に踏み迷つてゐることがあるから」との御誡めと拜し奉る。迷ひ易きは人の心である。入り易きは惡の道である。惡の花は世の中の到る所に咲き誇つて、人の慾心をそゝつてゐる。一輪折つて眺めると、なか〳〵綺麗な花である。更に一層美しい花が咲いてゐるので、またこれを手折つて見る。尙ほ人の心を滿足せしめる。かくて幾度か度重なる中に、深い〳〵惡の道に迷ひ込み、己の氣がついた時には、既に遠く、臍を噬むも遂に及ばぬに至ることがある。心すべきは惡の花である。

五月十三日

ものごとにうつればかはる世の中を
心せばくはおもはざらなむ

明治四十一年御製――「をりにふれて」

「おもはざらなむ」は思はずあれよとの意。「世の中には變遷といふことがある。別にくよ〳〵と思ひ煩ふ必要はない。大きな心を持つやうに」との御誡めと拜し奉る。人は周到の注意をしても、時に失敗や轉落がないといふことは出來ない。再び起たれぬやうな痛手を負うて、懊惱煩悶の裡に日を送る場合もないとも限らぬ。然しながら世の中は失敗だけの世の中ではない。また逢ふ春の愉快もあるものである。苦慮・懊惱は決して人生を明るくしない。軈て來るべき曉の喜を心に描いて、奮起するところに、再び人生の春は廻り來るものである。人は常に小心にして大膽なれといふ。

五月十四日

葦原のみづほの國の萬代も
みだれぬ道は神ぞひらきし

明治四十一年御製——「寄道祝」

「葦原のみづほの國」とは我が日本の別名。日本書紀・神代紀に「皇孫に勅して曰く、葦原の千五百の瑞穂の國は、是れ吾子孫の王たるべきの地なり。爾皇孫宜しく就きて治めよ。寶祚の隆んなること當に天壤と與に窮りなかるべし」とあるを御詠じ遊ばされたものと拜察し奉る。日本の凡ての國基といふものは、既に二千五百有餘年以前に確然と定められてゐたのであつて、決して後代に至つて定まつたものではない。而して二千五百有餘年以來、今日に至つてもなほ連綿として傳はり、少しも變つてはゐないのである。このわが建國の精神こそは、如何なる歐化の嵐に遭ふとも、微動だもするものではないのである。

五月十五日

なほざりに思ひしことも年をへて
おもひかへせばこひしかりけり

明治四十一年御製——「思往事」

「なほざりに思ひしこと」とは、その以前に等閑に過し給ひしこと。「年を經て往年を思ひかへせば、あの時にはかうもしたならばと、思ひやられることが多い」との御意と拜する。人間は過去を振り返つて見ると、さまざまの事象が走馬燈のやうに思ひ浮んで來ることであらう。或は樂しかつたこと、悲しかつたことなどが、交々思ひ出される。これが大層よいことであると思ふ。樂しかつたことがあれば、更に大きな樂みを作るやうに努力すればよいし、又、悲しかつたことがあつたならば、再びさうした過去の悲しさを繰り返さぬやうに心がければよい。過去の追憶こそ將來の誡めとなる。

五月十六日

村雲にあらぬものから世の中の
風にうきたつひと心かな

明治四十一年御製――「心」

「村雲」は一群の雲の義。「あらぬものから」はあらぬものながら、ないけれどもなどの意。「世の中の風」は世の風潮のこと。「人の心は叢雲ではないのであるが、世の中の惡風潮にうきたつて染み易いものである」と御誡め給ふ御製と拜する。人は常に堅い〳〵信念を持つことが何よりも必要である。換言すれば確固たる見識を持つてゐることである。甲の說を聞いて甲に靡き、更に乙の話を聞いては乙に賛成するといふやうでは、見識ある人とは言へない。恰も天空に彷徨ふ叢雲のやうに、風のまに〳〵吹き流されてゐるやうなものであつて、不見識この上もない人である。

五月十七日

われもまたさらにみがかむ曇なき
人の心をかゞみにはして

明治四十一年御製――「鏡」

「吾も世の中の龜鑑となるべき人を手本として、更に一層心に磨きをかけよう」との勿體なき御製と拜し奉る。英明の君にましく〳〵す　明治大帝にしてこの御歌を御詠じ遊ばされ給ふ。況んや我々凡夫の身に於ておやである。一日と雖も心の修養を怠つては、上陛下に對し奉り恐懼の極みである。同じ修養をするにしても、或る規準と目標とを立ててすることが必要である。例へば誠忠は楠木正成のやうな人になりたいとか。カーネーギーのやうな大實業家になつて見たいとか。新井白石や中江藤樹のやうな學者になつて見せるといふやうに、過去の偉人學者を手本として修養するやうにしたい。

五月十八日

谷川のおなじ流の水くみて
　鄰へだてぬみやまべのさと

明治四十一年御製――「山家鄰」

「谷川の同じ清流の水を汲んで、隣り同志が親しく暮してゐる山邊の里がうるはしいものである」との御意と拜する。山間の村里の人情は、都會のそれに比較するに、純朴・質實であることは、異論のないところである。都會の地にあつては、隣同士で住みながら、毎朝顏を合せても、挨拶もせぬといふほど人情が輕薄極まれるものである。如何に地方の生活と都會の生活とは異なるとは云へ、餘りにも個人主義に墮してはゐないか。互に牆壁を設けて交通せぬといふ心では、國民一致協力などは決して望み得ない事である。國家團結の前に先づ隣人を愛することが緊要である。

五月十九日

ぬばたまのよるこそ書はよむべけれ
　あだし事には心うつさで

明治四十一年御製――「夜」

「ぬばたまの」は夜の枕詞、ぬばたまは射干の實の義で、黑い物であるところから、夜・黑などの枕詞として用ゐるのである。「あだし事」は餘事のこと。「餘事に心をうつす必要はない。夜には一心に讀書をして、修養と知識を磨くことを怠るな」との御誡めと拜する。げに讀書こそは、幾千年以前の社會を眼前に見ることも出來るし、偉人・賢者と對談することも出來るものであつて、知識見聞をひろめるには、讀書に勝るものはない。寸暇あらば常に讀書によつて心を磨き、見聞を廣めることを忘れぬやうに努むべきである。たゞ机上の空論に墮せぬやうに注意が肝要。

五月二十日

ともすればうきたちやすき世の人の
心の塵をいかでしづめむ

明治四十一年御製——「塵」

「ともすれば」はやゝもすればの義。「いかで」は俗にどうしてといふに同じ。「人の心はやゝもすれば俗念にかられ易いものであるが、どうしてこの俗念をしづめることであらうか」との御述懷と拜する。眞に人情の機微なるところを巧みに御詠じ遊ばされた御歌である。黄金を見てはこれが欲しくなる。人の安泰な生活を見てはこれを羨む。紅燈の衢を見れば游心にかられる。社會の目に見、耳に觸れるものは、皆己を誘惑するものばかりである。どうしてこの場合その俗念を斷つか。確固たる克己心こそ、この俗念を斷つに最もよい利刃であらう。須らく人は本能に誘惑されてはならぬ。

五月二十一日

石上ふるき手ぶりもとひてみむ
物しる人を尋ねいでつゝ

明治四十年御製——「をりにふれて」

「石上」はふるいの枕詞。「手ぶり」は風習、ならはし。「新しい文化を吸收したまひつゝも、古き國風を尊重し給ふ」大御心の御發露と拜する。新奇を好むは人情の常であるが、魂の拔けた新奇は恰も幽靈のやうなものである。完全なる文化といふことは出來ない。「溫故知新」といふ諺の通り、新しい文化も、矢張り我が國の古來の國風の上に立つものでなければならぬ。殊に日本人は徒らに流行を追ふ癖があり、婦人に特にこの癖が大きい。時代の流行といふことが、熾んに新しがり屋の間に叫ばれてゐるが、我が國風を篤と考へて、その上に新時代の文化を築き上げるやうにしたいものである。

五月二十二日

世の中の人におくれをとりぬべし
すゝまむときに進まざりせば

明治四十年御製――「をりにふれて」

「この時こそ己の進むべき時であると見極めがついたならば、勇猛邁進しなければならぬ。若し躊躇してゐれば、世の中の人にとり殘される」との御誡めと拜する。何事にも姑息因循は禁物である。早計猪突も亦戒むべきであるが、熟慮千思を凝らして、ここが自己のなすべき時である。大いに活動すべき機會であると、確固たる信念が出來たならば、一瞬の躊躇も無用である。自己の確信に向つて奮然として猛進すべきである。必ずや汝の進むべき道には、成功といふいとも愉快な報酬が待つてゐることであらう。たゞ勇氣にあふれて道を踏み違へぬやうにくれ〴〵も心すべきである。

五月二十三日

よの人を導くまではあらずとも
進まむ時におくれざらなむ

明治四十年御製――「をりにふれて」

「世の中の人々を指導するといふ地位に達しなくともよい。せめて、世の中の人に遲れないやうに勉め勵めよ」との御諭しと拜し奉る。大日本帝國の國民は全部世界の模範たるべき人物となることは、極めて望ましいことで出來るならばさうありたいものであるが、人間各〻その本質や境遇を異にするために、それは願ふ可くして不可能な事に屬する。せめて時代から置き去りを喰はぬやうに、人に負けない努力と修養とが望ましいのである。世の中は一日一日と進んで、少しも停止するところはないのであるから、安閑として社會の進歩から落伍せぬやうにしなければならぬ。

五月二十四日

おもふこと思ふがまゝになれりとも
身を慎まむことな忘れそ

明治四十年御製――「をりにふれて」

「自己の希望が達せられて、或は高位高官の人となり、又は巨萬の富を得る身分になつても、身を慎んで人の道にはづれた行ひをせぬやうにせよ」と御誡め給ふ御製と拜する。貧賤より身を起した人、貧苦からたゝきあげた人ほど、その人が社會的地位を得た場合に、驕慢の心が起きたがるものである。「實るほど頭の下る稲穂かな」とは實によき諺である。乃木大將は一兵卒の身にもよく心をかけさせられたといふことであるが、乃木大將の人格が髣髴としてあらはれてゐるではないか。世の中の多くの人は、皆この乃木大將のやうな立派な人となるやうに心がけたいものである。

五月二十五日

世の中にしられていよゝみがかなむ
わが敷島のやまとだましひ

明治四十年御製――「をりにふれて」

「敷島の」は大和の枕詞。「我が日本の精神卽ちやまとだましひといふものがどんなものであるかといふことは世界に知られた。今後はますゝこの大和魂を磨けよ」との御諭しと拜する。去る明治二十七八年の日清戰役に於て大敵支那を懲らし、次には明治三十七八年の日露の大戰に强豪ロシアを降伏せしめて、大和魂の眞價が世界に知られたのである。同時に世界一等國の列に加はり、赫々たる旭日旗は、翻々として世界を風靡する勢を呈するやうになつた。我々はこの赫々たる國威を尙ほ一層宣揚して、正義の國日本の眞價を發揮するやうに努力しなければならない。

五月二十六日

目に見えぬ神にむかひてはぢざるは
人の心のまことなりけり

明治四十年御製――「神祇」

「人道は至誠にある。即ち「俯仰天地に愧ぢず」といふ公明正大な生活は、至誠なるもののみがよくするところである」ことを御諭し遊ばされた御製である。げに天は正義に與し至誠神に通ずるものである。誠の心がなかつたならば、近親にさへも己の心が通じないのである。況してや神に通ずる道理はない。人間は一心に誠の道さへ歩いてゐるならば、即ち神人合一の境地に到達したならば、貧苦もなく、心配もないものである。かういふ境地は實際に體驗した人でなければ判然とわかるものではないが、多くの人々はそこまで努力修養する人は尠ない。それで人を恨み世を呪ふといふことは最も慎むべきことである。

五月二十七日

わけのぼる道のしをりとなる松は
位なくてもうやまはれけり

明治四十年御製――「師」

「しをり」とは山中などで、道に迷はぬやうに、樹の枝を折りかけて、道じるしとするものをいふ。ここは指南の意味である。「道の師となる人は、社會的地位の高下にかゝはらず、尊敬すべきものである」ことを御諭し遊ばされた御製である。道の師とは必ずしも狹い意味ではない。學校に於ける教師も道の師であり、職業を授けられた人も亦道の師である。又、處世上についていろいろと指導された人も矢張り道の師である。これ等の師は假令その身高官に非ずとも、或は社會的地位がなくとも己の師たる以上、どこまでもこれを尊敬すべきことは人の道である。

五月二十八日

山深くかくるゝ人をむかへても
世を治むべき道をとはばや

明治四十年御製——「隱士」

「俗塵を避けて深山にかくれてゐる隱士を迎へても、政治の道を聞いて見よう」との御述懷と拜し奉る。畏れ多くも　明治大帝には斯くまでに治國のために御軫念遊ばされ給ふとは、吾々下國民として感泣の外はない。吾々國民も亦　明治大帝の御稜威を慕ひ奉つて、己の知らざるところはこれを知らずとして、人に聞くことを躊躇せぬやうにしたいものである。「聞くは一時の恥、聞かぬは末代の耻」といふ俗諺さへある。知らざるを知らずとする、これ知るなりである。半知半解の知識をふり廻して一角の物識りである。かの「たを態度をする者があるが、最も慎むべきことである。

五月二十九日

あだ波をふせぎし人はみなと川
神となりてぞ世を守るらむ

明治三十五年御製——「湊川懷古」

「みなと川」は攝津の國、いまは神戸市のうちとなつた。延元元年五月二十九日、足利尊氏が九州から大軍を率ゐて上京するに際し、楠木正成・新田義貞等がこれを湊川の地に邀へ擊ち、正成兄弟一族等、多くここに死んだのである。德川光圀卿は楠木氏の誠忠に感じ、「噫忠臣楠氏之墓」なる標を建立して、その誠忠を表し、明治に至つて別格官幣社湊川神社を建てゝ、その英靈を祀られてゐる。「あだ波」は賊徒尊氏のこと。「賊徒尊氏を防いでこの湊川の地に討死した楠公の魂は、今は神となつて我が日本國を守護してゐることであらう」と、楠公の誠忠を思召されての御歌と拜し奉る。

五月三十日

たらちねのおやの教をまもる子は
まなびの道もまどはざるらむ

明治四十年御製——「子」

「たらちねの」は親の枕詞。「親の教を守る子は、正しき學業を務めることであらう」との御意と拜する。孝は百行の本で道德の根本である。親に對して孝行なる子は學校に於ても亦好成績を得、卒業して實社會に出ても決して就職に困るやうなことがないばかりでなく、勤勉であるところから社長や重役から信用を得て他の人よりも立身出世が早く、一朝國家に有事の際には必ずや身命を賭して奮戰するものである。これ卽ち君に對して忠なる所以である。昔から親に對して孝行なる子に不忠の子はない。又、君に忠義な人には親に不孝な子はないのである。

五月三十一日

世の爲にいさをゝたてし老人は
千年の山もこえよとぞ思ふ

明治四十年御製——「老人」

「國家のために勳功をたてた老人は、千歲に至るまでも長命をさせておきたい」と功臣の健康を御詠じ遊ばされた御歌である。吉田松陰・西鄕隆盛・大久保利通・岩倉具視・木戸孝允・伊藤博文・山縣有朋・大隈重信・乃木大將等は明治維新以來の元勳として、國民も大いに崇拜し、又、これ等元勳の偉大なる人格を敬慕して自己修養の龜鑑としなければならない。近來の靑年は刹那主義であつて、永遠の計畫などを樹てるべく餘りに軟弱に墮して來た傾向があるが、誠に慨嘆に堪へぬ次第である。少しく明治の元勳の風貌に接して確固たる思想を持たなければならない。

六月一日

朝まだきねぐら離れてたつみれば
鳥もつとめはある世なりけり

明治四十一年御製――「朝鳥」

「朝まだき」は早朝の義。「早朝に塒を離れて何方へか飛んで行くところを見ると、鳥のやうなものでも、矢張り勤めといふことがあるものと見える。況してや萬物の靈長たる人間は鳥類に劣つてはならない。大いに奮鬪努力しければならぬ」との御諭しと拜する。人間と生れて一定の職業もなく、他人の厄介になつたり、或は人に迷惑をかけたりして生存してゐる人間は、鳥獸にも劣るものと謂はなければならぬ。安逸遊惰の人は一日も早く奮起の心を興し、天から與へられた知能と力能とを發揮して人間らしい人間となつて、正しい道を明るく生活して行くやうに自覺しなければならぬ。

六月二日

おのが身を修むる道は學ばなむ
しづがなりはひ暇なくとも

明治四十年御製――「道」

「しづ」は身分の卑い者をいふ。「なりはひ」は生業のこと。「たとひ生計に追はれて、暇のない身であつても、修身の道だけは忘れぬやうに學べ」との御諭しと拜する。暇はなくて學問は出來ないといふ人は、暇があつても矢張り學問をしない人である。釋迦がある時行脚をして喜捨を乞うた。ところが或る貧者は云ふやう、持ち合せがあれば喜捨するのであるが、今は持ち合せがないのでと、喜捨することを斷つた。釋迦はこれを評して、「錢がなくて喜捨せぬ人は、あつても矢張り喜捨せぬ人である」と云つたさうである。人は寸暇を得ても身を修める道だけは怠らぬやうにしたいものである。

六月三日

いつくしとめづるあまりに撫子の
庭のをしへをおろそかにすな

明治三十九年御製――「をりにふれて」

「いつくし」はいとしい、可愛いといふ義。「撫子」は兒童のこと。「庭のをしへ」は家庭教育のこと。「かはゆらしいと愛するあまり、幼子の家庭教育を疎略にせぬやうに」との御諭しと拜する。子供が成長して不良の徒となるのは、多くはその原因を家庭教育の怠慢に發してゐることは爭はれぬ事實である。兩親のない者とか、親が子供の愛に溺れた結果などが、その子供をして不良化せしめる原因となる。家庭教育が完全に行はれてゐる家庭から不良の子は出來ない。子供を可愛がるといふことは結構なことであるが、親が子供の愛に溺れる時は、子供の我儘を增長させて、遂に救ふ可からざる人となるのである。

六月四日

むらぎもの心たゆまず進みなば
さかしき山も越えざらめやは

明治三十九年御製――「をりにふれて」

「もらぎもの」は心の枕詞。「さかしき」はけはしい。「越えざらめやは」の「やは」は反語で、越えずにあらうか、否越えることが出來るであらうとの意。「心ゆるまず。一所懸命になつて進んだならば、どんなに嶮しい山でも越えられぬことはあらうか、越えられる」と御誡め給ふ御製と拜する。松島の瑞巖寺の草履取りが、伊達正宗に眉間を割られたのを殘念に思つて、早速京都に上り、刻苦精勵して遂に大僧正となり、瑞巖寺の住職となつて伊達正宗に面會し、正宗もその精勵に感じ、過去の罪を謝したといふ話があるが、人は懸命になれば、どんなことでも出來ないといふことはない。

六月五日

目に見えぬ人の心のよろこびも
聲によりてぞ聞きしられける

明治三十九年御製――「聲」

「人の心はなか〳〵目に見えぬものであるけれども、喜ばしい時には、華かにゑましく聞えるものである」との御述懷と拜する。單に喜怒哀樂の心ばかりではなく、誠實ある言葉と不誠實の言葉とははつきり區別のあるものである。心に誠のある人の言葉は數は少ないが、何んとなく力がこもつてゐるのに反して、誠のない人の言葉は多辯であつて、人の機嫌を害はぬやうに追從は言ふけれども、何處となく輕はずみのところがあるものである。人と交際する場合には、かういふところを餘程注意しなければ、思はぬ迷惑を蒙つたり、或は人の誠意を無にする場合があるから大いに注意を要する。

六月六日

いかならむときにあふとも人はみな
誠の道をふめとをしへよ

明治三十九年御製――「教育」

「如何なる場合にあふとも、人は皆誠の道を踐み行へよと教へよ」と教育の大本を御示し遊ばされた御歌である。學校教育に於ても、將又家庭教育に於ても、その兒童を教育するには、この　明治大帝の大御心を奉戴して行ふやうにしなければならぬ。人間の言動の根本は誠にある。人間から誠を取り去つたならばそれは禽獸と何等選ぶところがない。誠實・誠意といふことが人の行ひや言葉の根本をなすやうになれば、自ら輕卒な言動もなくなり、自然に信義といふことも重んぜられるやうになつて、立派な人と謂はれるのである。輕佻浮薄な世の中になりつゝあるに際して、特に誠を高唱する所以である。

六月七日

川舟のくだるはやすき世なりとて
棹に心をゆるさゞらなむ

明治三十九年御製——「寄船述懷」

「川舟で川上から下るやうな極めて安樂な世の中であるといつて、決して心に油斷があつてはならぬ。何時如何なる岩礁に衝突せぬとも限らぬものであるから」と心の油斷を御誡め給ふ御製である。今は生活の安定を得てゐるからといつて油斷をしてゐると、何時如何なる災難がふりかゝつて來ないとも限らない。會社が破産をして直ちに失職をする場合がないとも限らない。又、思はぬ天災地變がないと誰が斷言できるであらうか。かうした思はぬ災難に遭遇してから、あわてふためいたところでどうすることも出來ない。人は常に激流に棹さす心を以て世に處すべきである。

六月八日

いさゝかのきずなき玉もともすれば
ちりに光を失ひにけり

明治三十九年御製——「玉」

「ともすれば」はやゝもすると、どうかするとなどの意。「少しのきずのない完全な玉でも、どうかすると塵の中に埋まつて、光を失ふことがある」との御意と拜する。人も亦玉の如く、何等の缺點もないのに、世の毀譽褒貶を受ける場合がある。何等自分にやましいところがなかつたならば、世の毀譽褒貶に耳を藉す必要がない。又悲觀をする必要もない。然し徒らに興奮して世の中にさからふことは策の得たるものではない。靜かに世評の鎮まるのを俟つべきである。再び光りの發する時機を靜觀すべきである。又しかするやう自己の誠を致して努力するのが人の務めである。

六月九日

いく薬もとめむよりも常に身の
やしなひ草をつめよとぞおもふ

明治三十九年御製――「薬」

「いく薬」は靈薬をいふ。不死の薬である。「やしなひ草」は養生を草に比し給ふ。「不死の薬を求めるよりも、常にその身の養生につとめよ」と御諭し遊ばされた御製である。不死の薬によつて長命を保たうとしたのは秦の始皇帝であつた。その臣徐福に命じて不死の薬を求めるべく東海に遣はしたところが、徐福はそのまゝ行衛不明になつたと傳へられてゐる。薬によつて人間の長命を保たうと考へた秦の始皇の無智や思ふべしである。長命は常日頃の養生に如くはない。常に養生を守つて天命を全うすることは人間の義務であつて、不摂生に身を持ち崩すことは大なる不孝となる。

六月十日

世に廣くしらるゝまゝに人みなの
つゝしむべきはおのが身にして

明治三十八年御製――「をりにふれて」

「世に廣くしらるゝ」とは、功成つて世にその名が聞えてゐる。「功成り名を遂げて、世間にその名が知られるやうな人は、尚ほ一層その身を慎むべきである」との御諭しと拜する。まだ世の中にあらはれない人の行動はそれほど目立たぬものであるが、名士顯官と謂はれる人の一言一行といふものは、社會注視の的となり易いものである。故に一層その行ひを慎んで、苟しくも世評の的とならぬやうに注意すべきである。又之等の人々の言動を見た下々のものがこれに倣ひ易いもので、その影響することが極めて甚大である。これを思はゞ人の上にたつ者は一言一行と雖も忽かせにすべきではない。

六月十一日

手綱にもまかせぬものは勇みたつ
人の心のあらごまにして

明治三十八年御製——「をりにふれて」

「あらごま」は荒い駒で、荒れ廻る馬の義。人の奔放の心を荒駒に譬へさせ給ふ。俗にも意馬心猿といふ「人の奔放の心は、ひきしめむとすれども、なかなか鎮め難いものである」と、人の奔放の心を御諭し給ふ御製と拝する。世の落伍者となる多くの人々は、意馬心猿を止めかねた結果である。卽ち意志が弱かつたために、自己の心に負けたのである。己の心を己で制することの出來ない寧ろ憐むべき人々であるが、これも自業自得の結果で、誰にその罪を歸せむ術もない。人は常に自制の心こそ肝要である。何物をも燒わざには止まないといふ烈々たる自制心こそ、汝を大成せしめる唯一の友である。

六月十二日

こゝろざす方こそかはれ國を思ふ
民の誠はひとつなるらむ

明治三十八年御製——「をりにふれて」

「苟しくも日本國民たる者は、政治家・軍人・法律家・醫者・官吏・勞働者・教育家・宗教家等の區別こそあれ、國家を思ふ至誠の點に於ては皆一つである」との御意と拝する。強ち政治家だけが國家に忠誠な所以でもなければ、軍人だけが國家を憂へるといふ譯ではない。路傍に働く勞働者も、商舗を持つ一商人も國家を思ふといふ忠誠の心に於ては、何等政治家・軍人と選ぶところはないのである。故に一商人も一勞働者も自己の職業に勤勉精勵をして、直接國家の仕業に携はる官吏・政治家・軍人に劣らぬ誠忠を勵むやうに努めなければならない。國家を忘れた商人はユダヤの商人である。

六月十三日

ひらけゆく世のさま見ればなかくに
昔にかへることもありけり

明治三十八年御製——「をりにふれて」

「なかくに」却つての意。「ひらけ行く世の中のありさまを見るに、却つて昔にかへることもある」との御意と拜する。歴史は繰返すと西洋の學者は云つてゐる。實際近い例を以てするも、二三十年以前に流行した物が再び現代に流行することが決して珍しくない。思想的にも亦その通りである。維新に熾んであつた國家主義が昭和の御代になつて再び勃興を見てゐる。世の盛衰を見るに概ね斯くの如くである。青年たちは古い歴史を考へることもなく、徒らに新しがつてこれを信奉してゐるものも、その昔に流行したことに思ひつかば、別に左程に新奇を誇るにも及ぶまい。

六月十四日

いさみたつ人の心の若駒よ
あやふき道にすゝまざらなむ

明治三十八年御製——「をりにふれて」

「若駒」とは人の心のともすればはやりたつを譬へ給ふ。「すゝまざらなむ」はすゝまずあれよとの意。「ともすればいさみたち易いは人の心である。危い道に進まぬやうにせよ」と御誡め給ふ御製である。青年の心は血氣に任せて殊にはやりたち易い。世の中の經驗に乏しいところから思慮分別を缺いて盲進し易い。慎むべきは青年時代に於ける血氣の心である。青年時代に於いて身を誤るものは、多くこの血氣のためであることは、社會に起つた色々な事件がこれを證明してゐる。人は何事に拘らず慎重なる考慮をめぐらし確たる判斷と決意を俟つて徐ろに行動すべきであつて、輕擧盲動は大禁物である。

六月十五日

思ふことつらぬかずしてやまぬこそ
大和をのこのこゝろなりけれ

明治三十八年御製——「をりにふれて」

「思つた事を貫かずしてはやまない。これが卽ち日本男兒の本來の心である」との御意と拜する。ここに注意すべきは堅忍不撓の心と猪突といふことである。日本男兒の本領は猪突することではない。よく〳〵思慮遠謀をめぐらして、正しき判斷を得た時に於て、これが自己の思ふことであると確たる決定を得た時に決然として起ち、一度起つたならば、必ず中途に於て挫折するやうなことをせず、事の成ると成らざるは敢て問ふところではない。最後までやり通さずには止まぬといふのが、眞の日本男兒の本領である。かの爆彈三勇士の勇敢なる行爲を見よ。喃れ日本男兒の本懷ではないか。

六月十六日

ちよろづの仇にむかひてたわまぬぞ
大和をのこの心なりける

明治三十八年御製——「勇」

「ちよろづ」は數の多いこと。「たわまぬ」は屈せぬこと、不撓の意。「幾千萬の大敵に向つても、決して屈せぬのが、日本男兒の本心である」との御意である。大敵と雖も恐れず、小敵と雖も侮らず、これ古來からの武士道の精神である。楠木正成は湊川に於て、足利尊氏の幾萬人に、たゞ七百餘騎の軍勢で奮戰した。今日に於てもなほこの日本の武士道は儼然として存してゐる。かの日淸・日露の大戰にあつても、兵數に於ては到底日本の敵ではなかつたのである。彼は日本の幾倍にも及ぶ兵數を擁しながら、日本軍のこの幾千萬人もものかはといふ日本武士道の精神のためにうち負かされたのである。

六月十七日

とき遲きたがひはあれどつらぬかぬ
ことなきものは誠なりけり

明治三十八年御製——「誠」

「早い遲いの相違はあるけれども、誠さへあれば、志を貫き通すものである」との御意と拜する。明治大帝の御製を拜するに、誠に關する御歌が比較的多いやうに拜察されるのであるが、吾等國民たる者は、苟且にも　明治大帝の大御心に反くやうなことがあつてはならない。本書にも　明治大帝の大御心を奉戴する意味を以て、誠の御題を數種謹解してある。人生の修養は誠といふ一字に盡きるやうに考へたからである。個人としても社會人としてもこの誠を以てすれば、充分である。現代の稍〻輕佻浮薄に流れつゝある社會に警告を發する意味で、この誠を種々なる方面から説明してある。

六月十八日

おこたらず學びおほせていにしへの
人にはぢざる人とならなむ

明治三十八年御製——「學生」

「學びおほせて」は學び卒へての意、「怠ることなく學業を卒へて、昔の菅原道眞・和氣清麿・楠木正成新田義貞・水戸黄門・大石良雄・賴山陽などの人に恥ぢない人となれよ」との御諭しと拜し奉る。最近大學卒業生といふやうな高等の教育を受けた若い青年達の思想を見るに、甚だ寒心に堪へぬものがある。學校を卒業しても職業がない。故に學問は何の役にも立たないといふ論をなして、この不況の世の中を呪ふかの言をなすものさへあるのを見受けるのであるが、非常に誤つた考へ方であると思ふ。彼等は眞の人間となるべく高等教育を受けたのであつた。學校は就職の便宜のために入學したに過ぎないのか。

六月十九日

ちはやぶる神のをしへをうけつぎて
人のこゝろぞたゞしかりける

明治三十八年御製――「教」

「ちはやぶる」は神の枕詞である。「我が日本人は神の心を受け繼いで、その心が正しいのである」との御意と拜する。神は全知全能にして正義を愛するものである。我が國は神國であつて、凡て神の造らせ給ふことは、古事記・日本書紀等の古記錄によつて明かである。こゝが諸外國と我が日本との抑〻建國の當初から相違するところである。建國と同時に、神によつて國をしろしめされ、萬世一系の天皇は神系におはしますことはこの日本だけで、他の諸外國にその例を見ざるところである。故に日本人は非常に正義を愛し、武士道的精神に充ち〳〵てゐるのである。これが我等國民の誇りとするところである。

六月二十日

柴かりにいとけなきよりいづる子は
まなびの道に入るひまやなき

明治三十八年御製――「樵夫」

「いとけなき」は幼時、小さい時。「小さい時から柴かりに行つてゐる子供は、學問する暇はないであらう」と、山間僻地には自ら教育も普及しない處もあるべきかと思召されての御製と拜する。明治天帝には、他の御製に於て「如何に忙しい生業に從事してゐても、學問だけはせよ」と學問を奬勵せさせ給ふ。最近にあつては如何に山間僻地と雖も教育の普及せぬ所とてはないであらうが、不幸にしてさうした境遇に人となつた人は、一寸の暇を利用して、常識を備へる程度の學問だけは必ずしておかねば、年老いて必ずや後悔するであらう。

六月二十一日

國のためいよ〳〵はげめちよろづの民のこゝろをひとつにはして

明治三十八年御製——「民」

「八千萬同胞が、心を一つにして、卽ち協力一致して國家のために相勵むべきである」と御諭し遊ばされ給ふ。個人的思想を持つてゐては、國民の一致協力といふことはなか〳〵行ひ難いことである。我利々々の個人主義思想を捨てゝ、我等は日本といふ一大家族の人であつて、皆等しく　陛下の赤子であるといふ觀念に立つたならば、何も牆壁を高くして隣同士が睨めつこをしてゐる必要はないのである。思想國難が侵入して來たならば、國民が一致協力して撲滅すればよい。又、失職者が多くなつたならば、互に同一家族の人であるから、深切に世話して職を授してやればよいのである。

六月二十二日

年高き老木の松はいにしへのあととふ道のしをりなりけり

明治三十八年御製——「老人」

「年高き老木の松」は、老人の剛直なさまを老松に比して宣うたのである。「しをり」は山中深くわけいる時などに、枝などを折つて道しるべとするものをいふ。「いにしへのあととふ道」とは古い道を尋ねる道の意である。「老人は古い道を尋ねる道しるべである」との御意と拜し奉る。昔の制度や典禮といふものは青年の間には知られない。長命を保つた老人は、長い間の社會に經驗を持つてゐるだけに、さま〴〵のしきたりや風習といふものをよく心得てゐる。老人こそは、青年達が古いしきたりなどを尋ねる時のよき道案内であり、尊き指導者である。